

# 住宅クロスレビュー | 06 複合住宅

## 住を中心とした複合建築が 生み出す新たな可能性

取材・文 | 松浦隆幸  
写真 | 藤塚光政 (特記以外)

異なる時代につくられた、もしくは異なる世代の設計者につくられながら、共通するテーマをもつふたつの住宅を取り上げ、それぞれの設計者が語り合う「住宅クロスレビュー」。今回のテーマは「複合住宅」。ともに2018年に完成した建築を巡った。ひとつは北山恒氏と工藤徹氏による「HYPERMIX」。基準階にて、住戸とオフィスがコモンスペースを介して併存しているのが特徴だ。もうひとつは駒田剛司氏と駒田由香氏による「西葛西APARTMENTS-2」。約20年前に自らが設計した集合住宅の隣に立つ。十字形柱の構造を反復するかたちで全体が統合的に構築されている。多様性やアクティビティといった現代的な要求に対して、建築はどのようにあるべきなのか。集合住宅を多く手がけてきた4氏に話を伺った。

2018年  
「HYPERMIX」  
北山恒  
工藤徹



きたやま・こう 建築家/1950年香川県生まれ。1978年ワークショップ共同設立。1980年横浜国立大学大学院修了。1995年architecture WORKSHOP設立。2001年横浜国立大学教授。2007年同大学大学院Y-GSA教授。現在、法政大学教授。  
くどう・とおる 建築家/1974年千葉県生まれ。1997年architecture WORKSHOP入社。2004年より同パートナー。2017年(株)HYPERMIX設立。現在、同取締役。  
主な作品に、「白石市立白石第二小学校」(1996、BCS賞ほか)、「公立刈田綜合病院」(2002、日本建築家協会賞ほか)、「洗足の連結住棟」(2006、日本建築学会賞〈作品〉ほか)がある。



西葛西APARTMENTS-2にて

2018年  
「西葛西APARTMENTS-2」  
駒田剛司  
駒田由香



こまだ・たけし 建築家/1965年神奈川県生まれ。1989年東京大学卒業、香山壽夫建築研究所入社。東京大学助手を経て、2000年(有)駒田建築設計事務所共同設立。現在、前橋工科大学工学部総合デザイン工学科准教授。  
こまだ・ゆか 建築家/1966年福岡県生まれ。1989年九州大学卒業後、東陶機器、サティスデザインを経て、1996年駒田建築設計事務所設立。2000年(有)駒田建築設計事務所共同設立。現在、明治大学兼任講師。  
主な作品に、「西葛西APARTMENTS」(2000)、「Y-3」(2009)、「SLIDE西荻」(2009)、「ROROOF」(2017)がある。



1



2



3

いわゆるシェアハウスやSOHOに似ているようで、違う。「超混在都市単位」という副名称が付くHYPERMIXは、これまでにない形で「住」と「職」を緩やかにブレンドしている。下層階（地下1-地上2階）をカフェやスポーツジムなどで構成。中間免震層を挟んだ上層階（地上3-9階）に、住居ユニット（寄宿舍）とオフィスが入る。新しい試みが見られるのは、住居ユニットとオフィスの関係だ。同じフロアにある住居ユニットとオフィスが、共用部を介して「空間」と「時間」を共有する。プロジェクトの企画段階から建築家が参画し、初期投資とランニングコスト、さらに賃料も抑えて、息の長い事業計画を立案。上層階は、整然としたグリッドで構成する純ラーメン構造で、将来のプラン変更や用途変更にも柔軟に対応できるようになっている。

# HYPERMIX

北山恒十郎 藤徹



東西方向断面図 S=1:400



4



5

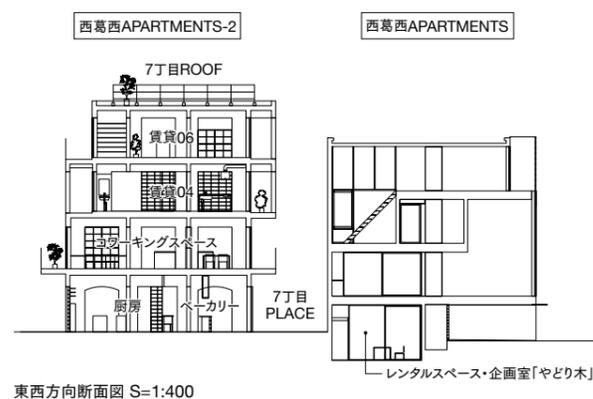
- 住居ユニットとオフィスの共用部にある共用キッチン。写真左手は、共用部に面して並ぶ東側の5つの住居ユニット
- 東側の各住居ユニット内は2部屋に分かれている。2部屋間は施錠して仕切れるので、共用部に面した1部屋をパブリックとプライベートの中間領域としても使える。現在は、公開ライブラリーやワークスペース兼ミーティングスペース、ネイルサロンなどに使われている
- 住居ユニットとオフィスの共用部。3-6階の各階にある。写真右手はオフィス、奥の廊下は西側の住居ユニットに通じる。共用部は、居住者とオフィスワーカーの交流の場としてさまざまに活用されている
- 東側住居ユニットの内観。リビングや水まわりを共有して、各住居ユニットの面積を抑えた。東側の住居ユニットは約20㎡、西側は約15㎡のワンルームとなっている
- 3階より上階には、建物外周を回遊できるバルコニーが巡る。日射制御や劣化抑制、メンテナンス性の向上といった効果もあわせもつ。気候のいい季節には、入居者の憩いの場にもなる

# 西葛西APARTMENTS-2

駒田剛司+駒田由香

最寄り駅から徒歩10分ほどの住宅地で、地域に「集う」「住む」「働く」「商う」場の提供を試みた4階建ての複合建築。西隣の集合住宅「西葛西APARTMENTS」(2000)との間に、まちに開放されたテラスがあり、1階にカフェ併設のベーカリー、2階に事務所とワークスペース、3-4階に6戸の賃貸住宅が入る。建物は、壁式鉄筋コンクリート造で約3mの規則的なグリッドの開放的なスケルトンをつくり、適宜、間仕切りを設けることで、上下階で異なる用途に対応した。将来のプラン変更や用途変更に対する柔軟性も高い。法規上は5階建てまで建てられるが、初期投資やメンテナンス費の負担が大きいエレベーターの設置を回避するために4階建てに抑えた。

- 1 2階のワークスペース。建物全体の構造は壁式鉄筋コンクリート造。門型に開いた壁が、約3m間隔でグリッド状に連続する。ワークスペースと事務所が同居する2階には、開放的なスケルトン空間が広がる
- 2 3階の賃貸住戸。特徴的な構造体に合わせ、各住居ごとにプランが異なる。鉄筋コンクリート造の躯体に対して、それ以外の設備や間仕切りに木やブロックを用いることで、将来的な可変性を担保している
- 3 「西葛西APARTMENTS」との間に生まれたテラス「7丁目PLACE」を2階バルコニーから見る。テラスはまちの人たちが自由に利用できる。暖かい時期には1階のベーカリーでパンを買った人が食事をしたり、マルシェを開いたりしてにぎわいが生まれている
- 4 1階にテナントとして入るベーカリー。パンの販売だけでなく、カフェ・レストランも営んでおり、昼・夜ともに客足が途絶えない。門型の壁式鉄筋コンクリート造は、1階のみ一部の梁をアーチ状とした



東西方向断面図 S=1:400



1



2



3



4

## 住居とオフィスの共存で 多様なコミュニティを誘発

—今日は東京の下町、門前仲町にあるHYPERMIXに来ました。最も特徴的なのは、住居ユニットとオフィスが共存している3階から6階までです。さっそく見学させてください。

**北山** 上階へは屋外の貫通通路に面した大型エレベーターでアプローチします。20人乗りで、自転車も載せられます。貫通通路は開放していて、24時間、誰でも通れますが、エレベーターはIDがないと乗れません。訪問者はインターホンで入居者やオフィスを呼び出し、解錠してもらって乗ります。では6階へ行きましょう。

**駒田由** エレベーターを降りた正面はお店ですか。商品のようなものを飾っていますね。

**北山** エレベーターを降りた正面の廊下沿いはガラス張りのオフィスです。住居ユニットはその向こうにあります。住居ユニットとオフィスが共存する3階から6階までは、建物の外周に廊下とバルコニーを連続して設けていて、歩いて一周できます。

**工藤** バルコニーから住居へアプローチできますが、ほかの住居ユニットの前を通ることになるので、現状では共通の玄関か勝手口のどちらかを使っています。ただし、オフィスはバルコニーから直接出入りできます。では玄関に入って共用部に行ってみましょう。

**駒田剛** この共用部は、住居とオフィスの入居者が一緒に使っているのですか。

**工藤** そうです。オフィスの人たちが打ち合わせや休憩をする場であると同時に、住んでいる人のリビング的な空間でもあります。キッチンも共有して使っています。なので、オフィスの人が多めにコーヒーを淹れて、住民と一緒に飲んでいるような光景が見られます。時間帯や曜日などによって、働く人や住む人が入り混じってさまざまな使われ方がされています。

**駒田由** ここはシェアハウスではありませんよね。

**工藤** ええ、シェアハウスではありません。住居と事務所が同じフロアに同居しているので、共用部はパブリックの空間です。共用部の北側がガラス張りのオフィス、東西に住居ユニットを配置して、共用部の東西端で区画を取りました。住居ユニットは東に5つ、西に3つ。東側のユニットは、直接共用部に接しています。

**駒田由** 東側にある住居ユニットの内部は2部

屋に分かれているのですね。

**工藤** 東側の住居ユニットは、室内に間仕切りがあって、共用部との関係を調整できるようになっています。実際、住居ユニットごとに違った使われ方がされています。間仕切りを閉めて共用部側の部屋に本を並べ、扉を開け放して公開ライブラリーにしている人もいれば、共用部側を待合室にして、奥の部屋でネイルサロンをやっている人もいます。

**駒田剛** 住居ユニットの使われ方は、住居と仕事場どちらのほうが多いですか。

**工藤** 3分の1くらいは仕事場として使っていて、その多くは近くの自宅から通っています。住居ユニットの使われ方を見ると、世の中にはけっこう多くの個人事業者がいることがわかります。

**駒田由** 共用部の使い方には、何かルールを決めているのですか。

**北山** 基本的に自主性に任せています。運営サイドで細かなルールを設定してしまうと、「ルールを守ってほしい」という人が現れてくるのが懸念されます。一緒に過ごす人たちの間で自然にルールが生まれるようにしたほうが、良好なコミュニティの形成を期待できます。聞くところによると、HYPERMIXでもいろいろなルールができていそうですが、どうやらフロアごとに少しずつルールが違うらしいのです。集まる人によって、そのコミュニティが必要とするルールが違うことがよくわかります。

—都市におけるコミュニティ形成や、そのための建築のあり方、あるいは建築家の職能に対する考え方は、「西葛西APARTMENTS-2」とも共通するところがあるような気がしますね。



1



2



3

- 1 敷地内に設けた貫通通路は周辺住民も利用できる。通路を挟んだ左手のエレベーターで上層階へアクセスする
- 2 最上階から階下の中庭を見下ろす。この2フロアは通常の独立した住戸・オフィスになっている
- 3 1階のカフェスペース。レンタルスペースとしても人気で、イベントやパーティなども開かれている

## 住宅エリアの集住に店舗併設 テラスを開放してにぎわいと呼ぶ

—HYPERMIXから東に移動して荒川を渡り、江戸川区の西葛西に来ました。商業地の門前仲町に対して、このエリアは住宅地ですが、そうした環境のなかで「西葛西APARTMENTS-2」は何を目指したのですか。

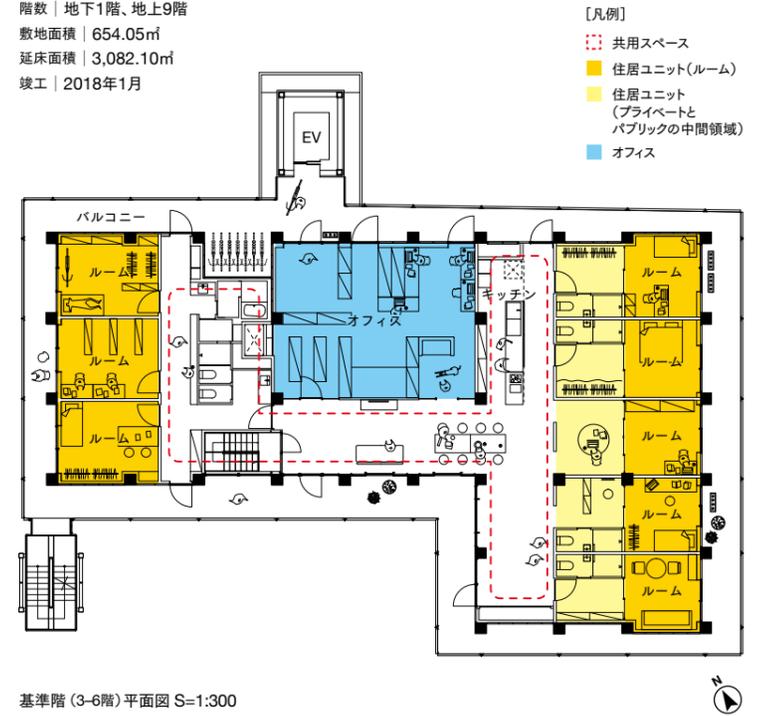
**駒田剛** この辺りも集合住宅がたくさん立っていますが、駅から徒歩10分くらいになると店舗の経営は厳しいと考えられています。そんな住宅地のなかでも、地域の人たちが集まり、にぎわいのある場を提供したいと思いました。

**駒田由** じつは、私たちは設計者であるのと同時に、この建物の建て主でありオーナーでもあります。1階のテナントにはパン屋さんに入ってもらいたいと思い、地元で人気のベーカリーへ「営業」に乗り込みました。初めは怪しげな目で見られましたが、手軽に飲食のできる場をもちたいと考えられていたこともあって理解を得られ、テラスのつくり方など一緒に話を進めました。

1階のオープンスペースは、そのベーカリーがカフェのテラス席として使うのと同時に、3-4階の住人のアプローチでもあります。さらに、誰で

### HYPERMIX

所在地 | 東京都江東区  
設計 | architecture WORKSHOP  
施工 | 佐藤秀  
構造 | 鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造、中間層免震  
階数 | 地下1階、地上9階  
敷地面積 | 654.05㎡  
延床面積 | 3,082.10㎡  
竣工 | 2018年1月



も入れるオープンスペースとして開放しているので、住人とは関係のない子どもたちが集まっではしゃいでいることもあります。

**北山** 設計者自身が建物のオーナーだというのはいいですね。

**駒田由** 普通のオーナーに同じような提案をしたら、テナントが入る保証はあるのか、運営は成り立つのかと問いただされそうですね。もちろん私たちも運営していくことになるので、企画から建設費、賃料のこまごまかなり検討して、設計も紆余曲折がありました。

**駒田剛** 2階のコワーキングスペースはまだ募集前ですが、西葛西にもいくつかそうした場所があります。駅周辺のコーヒーショップで仕事や勉強をしている人も多いので、賃料を抑えればニーズはあるだろうと考えています。

**北山** 2階は駒田さんの設計事務所とコワーキングスペースが共存する感じですか。

**駒田由** はい。構造は門型に開いた約3mグリッドの壁式RC造なので、門型の開口部に書棚を置いたり、コンクリートブロックで間仕切りして、緩やかに区切ることはできます。

**北山** この構造形式を選んだのは、どのような理由からですか。

**駒田剛** 最も大きな要素は建設費です。初めはRCラーメン構造も考えていたのですが、どう

してもこの規模ではコスト的に厳しい。いろいろと検討した結果、門型の壁式RC造をグリッド状に配置して、開放的なスケルトンの空間にしました。1階から4階まですべて同じグリッドの構造を積み上げています。建設費を抑えられるだけでなく、店舗から事務所、住居まで、必要なスパンの違う空間が上下に重なっていても、間仕切りの仕方によってどんなプランにも対応できます。

その意味では、HYPERMIXの上層階も規則的なグリッドで構成していましたね。

**北山** ええ、3mをベースにしたグリッドで躯体を構成しています。耐力壁のない純ラーメン構造なので、こと同様に、将来の変更に対しても柔軟なプランニングが可能です。

約3mというスケールのグリッドは、型枠のパネル割りからはじき出したものでもあります。設計・施工から、コスト、そして使い方に至るまで、トータルに合理性をもつスケールのグリッドです。

**駒田剛** 約3mのグリッドになっている背景には、人間の身体寸法がありますよね。

**駒田由** 内法で四畳半のスケールだから身体になじむし、家具の置き方によって雰囲気も変わる。とても扱いやすい空間のスケールです。

**駒田剛** それと、建設から維持管理までのコストも重要です。適正なコストでなければ社会性



1



2



3

- 元々この地域にあった人気ベーカリー「gonno bakery market」が移転して1階に入居した
- 気候のいい日の「7丁目PLACE」。住宅街ににぎわいを生んでいる【写真提供：駒田建築設計事務所】
- 西葛西APARTMENTSの1階を「やどり木」というレンタルスペース・企画室とし、「7丁目PLACE」と一体的な活用を考えている

は得られません。  
**工藤** その通りで、HYPERMIXも初期投資からメンテナンスコストまで、ライフサイクルを強く意識して設計しました。たとえば、建物の外周に廊下とバルコニーを巡らせたのは、足場なしで外装をメンテナンスできるよう考慮して、ランニングコストを軽減する狙いもあります。単にコストを削るのではなく、合理性のある企画、設計、施工、運営によって適正に抑えています。  
**駒田由** 施工単価が西葛西APARTMENTS-2とほとんど同じだと知って驚きました。

### 緩やかな混在に適した3mグリッドのスケルトン空間

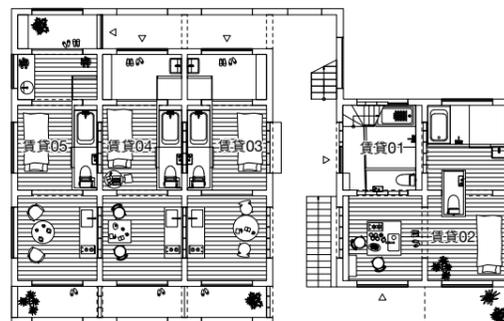
——ライフサイクルコストを意識して、ほぼ同スケールのグリッドで壁のないスケルトンをつくり、異なる用途を納めている点が共通しています。

まちというのはやはり「住」を軸に考えることが大切だと再認識しました——駒田剛司

そこは、「住」を柱にした都市の複合建築として興味深いところ。HYPERMIXはどのような経緯で設計が始まったのですか。  
**北山** じつはHYPERMIXのオーナーは、私たちが設計した賃貸集合住宅「洗足の連結住棟」(2006)の入居者でした。その後、HYPERMIXのオーナーとなる彼からプレゼンを受けたのがこのプロジェクトの始まりです。そのとき、彼はこんな話をしていました。「日本は、衣食住のうち、衣と食はリーズナブルで品質のよい商品群が充実している。しかし、住だけはいくら探してもそういうものがない」と。ですからHYPERMIXは、リーズナブルな賃料で提供できる質の高い空間を目標にスタートしたのです。  
**工藤** 日本では、賃貸住宅は持ち家を手に入れるまでの「過渡期の住まい」だと捉えられています。それは違うとも話していました。  
**駒田剛** 住居のある空間にオフィスをビルトイン

して共有するというイメージも、オーナーがもっていたのですか。  
**北山** 検討の過程で、こちらから提案しました。いろいろと検討してみると、法的に住居をつくりづらい部分が出てきます。不動産的な発想だと、それでもなんとかして住居をつくり商品化するのですが、私たちはそこに働く人たちを入れてみようと思ったのです。  
**工藤** このプロジェクトで私たちがずっと意識していたのは、「場所を貸す」というよりも「時間をマネジメントする」ことでした。住居だけの建物は、昼間は働きに出てしまって人がいなくなります。そこにオフィスなどを入れると昼間も人がいて、空間を有効に使えます。  
**北山** そういふ共同体のようなものにしたいという思いがありました。住む人や働く人が空間を共有して、一人ひとりが自立していながらもルーズにつながっている。家族とは違ったところで信頼できる人間関係をつくるにはどのようにしたらいいのか。それには、ある程度、入居者を選ぶところまで踏み込む必要がある。HYPERMIXでは工藤さんが宅地建物取引

士の資格を取り、運営にも携わっています。  
**駒田由** 世の中ではシェアハウスが流行っていますが、どこか社会のファンタジーのような印象がありました。それに対して、HYPERMIXは意図的に混然とした空間をつくり、そのなかで一定のルールが自然に生まれている。今でいうシェアの「その先」の建築を見た気がします。  
**北山** オフィスを入れたことで共用部がパブリックになり、シェアのような生ぬるい空間ではなくなりました。聞くと、シェアハウスはジャージ姿で歩けるけれど、あの共用部にはジャージでは出て行けないそうです。そういう都市性があると、自ずと社会的なルールが生まれてきます。その辺りがシェアハウスとの違いで、その意味ではHYPERMIXはまちなのです。  
**工藤** 日本では高度経済成長期以降、旧来の閉鎖的なコミュニティを批判し、結果としてばらばらの個人になりました。それでは寂しいからもう一度集まりたいけれど、どうすればよいかわからず、社会がまだ模索している状況です。人の出会いや可能性を広げるような建築のあり方を追求していくと、HYPERMIXのような混在系になるのではないかと思います。  
**駒田剛** そのためには集まりの規模をどう設定するかも重要ですね。1つの店舗、6住戸、それに事務所という西葛西APARTMENTS-2はほどよい規模のような気がしています。  
**北山** HYPERMIXは、住居ユニットとオフィスで各フロア10人くらいです。野球は9人、サッカーは11人。だいたいそのくらいのスケールだと、良好な関係のなかで共有できるルールが



3階(住居フロア)平面図 S=1:500

**西葛西APARTMENTS-2**  
 所在地 | 東京都江戸川区  
 設計 | 駒田建築設計事務所  
 施工 | 山庄建設  
 構造 | 鉄筋コンクリート造  
 階数 | 地上4階  
 敷地面積 | 305.72㎡  
 延床面積 | 528.20㎡  
 竣工 | 2018年9月

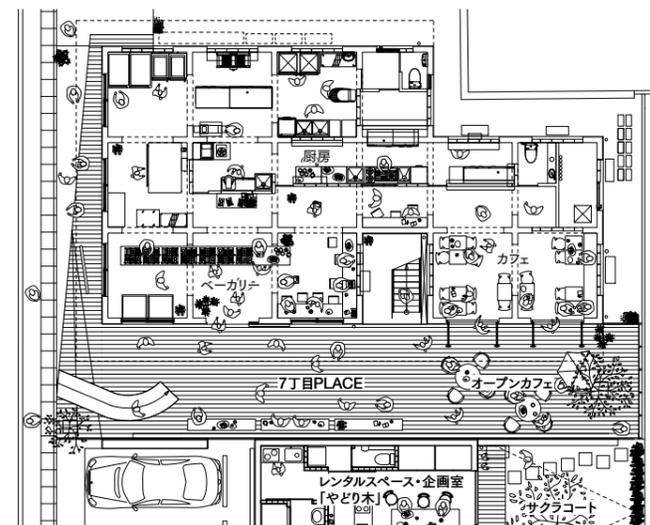
## 社会をサポートするインフラとなる 新しい建築のタイポロジーを打ち出してほしい——北山

生まれるのだと思います。  
 ——今後も、さまざまな形で「住」を柱とする複合建築が生まれてくると思います。それはどのような建築であるべきなのか。そのとき建築家はどのように振る舞うべきなのでしょう。  
**北山** HYPERMIXではスパンの異なる3つの時間を同時に設計しました。長く存続する「建築の時間」、人間の「生命の時間」、そして日々の暮らしの「生活の時間」です。その結果、導いたのがグリッドで構成した建築のサポートシステム(スケルトン)です。約3mというグリッドは、人間の身体スケールや行為と整合します。このサポートシステムを建築として用意し、使う側が生活の時間をデザインできるようにしています。今日、西葛西APARTMENTS-2を見学して、同じ発想で設計されていることに気づきました。  
**駒田剛** 最近の集合住宅の多くは、土地活用という観点で建てられていますが、そうではないあり方を示したいと思っていました。今日、HYPERMIXを見学して、まちというのはやはり「住」を軸に考えることが大切だと再認識しました。当たり前のことですが、近代以降の日本ではそれができていない。

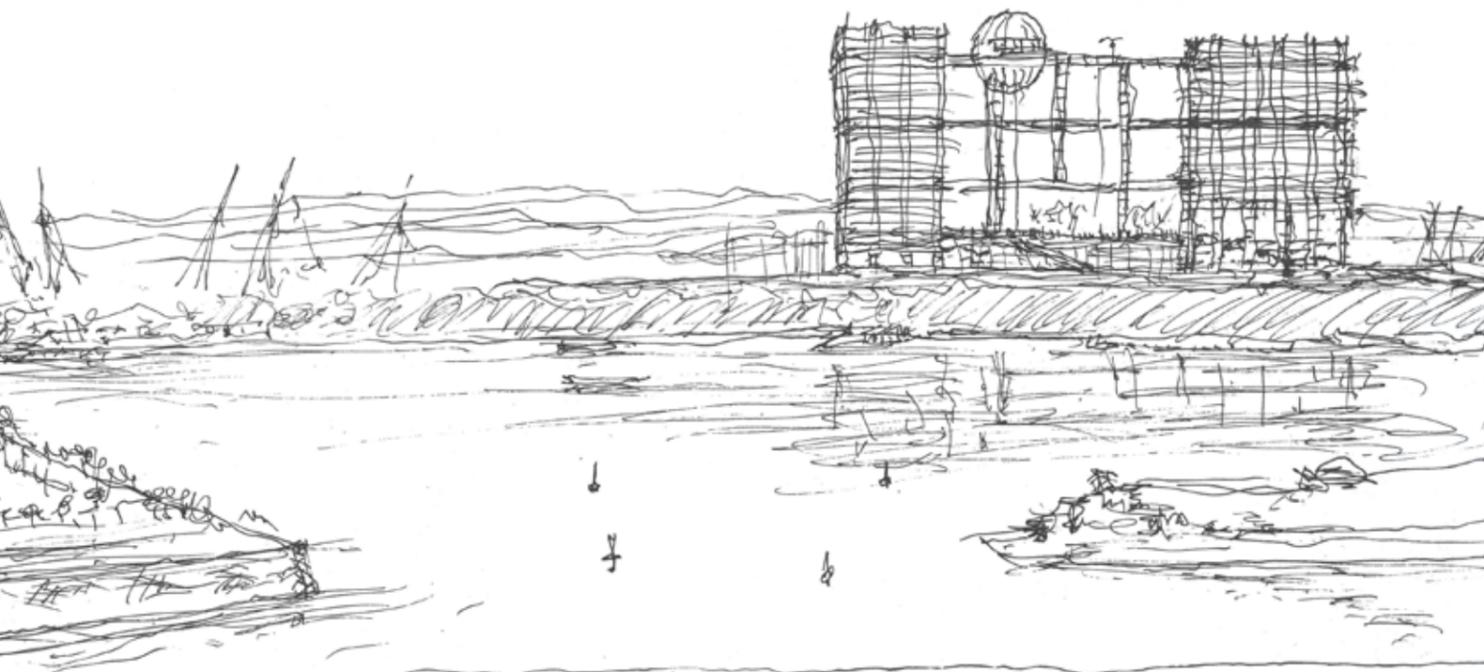
**北山** 私たちはプライベートとパブリックの空間を操作するのが建築だと教わり、そういう設計をしてきました。今でもそうした商品化住宅が、都市の生活をサポートするものとして大量に供

給されています。しかし、人は切り分けられて暮らしているわけではない。本当はもっと混在して、気ままに暮らしたい。そのことを意識してプライベートとパブリックという概念を乗り越えると、全く違った新しい空間が生まれます。  
**駒田剛** 近年の建築家は、商品化住宅のようなシステムチックなものからどれだけ離れられるかで勝負してきた側面があります。しかし、じつはそうではない。私たちも社会のシステムをつくっていかなければいけないですね。  
**駒田由** そうした意識をもつオーナーも増えてほしいですね。そのためにも、建築家が事業として説得力のある設計提案ができるようになる必要があります。今回、自ら施主と運営の経験をして、そのことがよくわかりました。  
**北山** これから人口が減っていくわけですが、若い建築家の人たちには、建築を表現としてではなく、社会をサポートするインフラとして考え、新しい建築のタイポロジー(類型)を打ち出してほしいですね。そうすれば建築家の仕事はたくさんあるはず。

松浦隆幸 まつうら・たかゆき  
 編集者、ライター/1966年東京都生まれ。1990年東京理科大学工学部建築学科卒業後、日経BP社入社(日経アーキテクチャ記者)。1994年退社。農業生活などを経て、2005年に編集事務所オン・ザ・ロードを設立し、現在に至る。



1階(店舗フロア)平面図 S=1:500



フジテレビ本社ビル スケッチ [提供：丹下都市建築設計]

## 建築家の〈遺作〉| 03 丹下健三「フジテレビ本社ビル」

談 | 丹下憲孝 (丹下都市建築設計会長) 取材・文 | 磯 達雄

### 東京湾に現れた立体格子の「都市」

遺作とは一般に、小説家や芸術家による生前最後の作品を指す。

建築家の場合、デビュー作については注目されるが、

遺作についてはあまり論じられることがない。

この連載では、日本の戦後建築界を代表する建築家を1人ずつ採り上げ、

その関係者の仮説をもとに〈遺作〉の特定を試みる。

そしてあまり触れられないことがない晩年の思想を掘り下げることで、

建築家の生涯を再評価してみたい。

第3回は丹下健三について、その子息であり、

事務所を受け継いだ丹下都市建築設計の会長でもある丹下憲孝氏が語る。

〈遺作〉として挙げられたのは「フジテレビ本社ビル」。それは丹下健三の集大成だったという。



丹下健三 たんげ・けんぞう  
建築家 (1913-2005) / 主な作品に「広島平和記念公園」(1955)、「香川県庁舎」(1958)、「国立屋内総合競技場」(1964)、「東京カテドラル聖マリア大聖堂」(1964)、「東京都庁舎」(1991)がある。[写真：斎藤康一]



1

#### 父との対話を重ねてつくりあげたプロジェクト

丹下健三の設計活動を振り返って、晩年の重要な作品には「東京都庁舎」(1991)や「新宿パークタワー」(1994)などがありますが、遺作として挙げるならば、私は「フジテレビ本社ビル」(1996)だと思います。

私が父・丹下健三の設計事務所に入ったのは、1985(昭和60)年でした。ハーバード大学GSD(デザイン大学院)を卒業して、建築をそれなりに勉強したつもりで父の元へ帰ってきたのですが、入社直後に、自分が建築をまったくわかっていなかったことを思い知りました。現実には甘くなかったですね。

「フジテレビ本社ビル」のプロジェクトが始まったのは1990年代の初めでした。お台場に立つ2つの建物、「東京ファッションタウン」(1996)と「フジテレビ本社ビル」の事業コンペが同時期に行われ、私たちの事務所が事業者とともに両プロジェクトの設計者に選ばれました。そのうちフジテレビの方を、私はコンペから完成まで担当しました。そのころは、私も少しは建築をわかるようになって

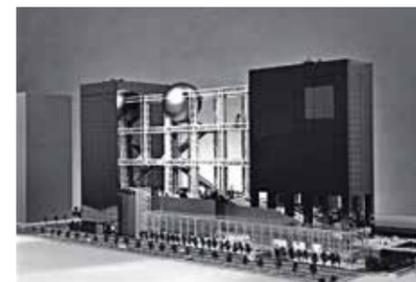
いたのでしょうか。

父はすべてのプロジェクトに設計の段階から熱心に取り組んでおり、父にとって非常に意味のあるこのプロジェクトにおいても頻りに現場へ足を運んでいます。私にとっては、父との対話が最も多かった作品でした。

#### 構造家とのコラボレーション

私たちの仕事の進め方は、いろいろな案を検討することから始まります。フジテレビ本社ビルでも、50-60ぐらいの案をスタイロフォームでつくるマスケールで検討しました。

模型を並べたスタジオに、父は毎日やってきます。「どうですか?」と言いながら入ってきて、模型を見ながらディスカッションをする。「これは続けてみましょう」「これはちょっと無理ですね」、そんなことを言いながら、案が次第に絞られていきます。10案ぐらいに減り、さらに3案ぐらいになったあたりで、「そろそろお客さまにお見せしてもいいんじゃないでしょうか」となります。そのような体力勝



2



3

- 1 フジテレビ本社ビル外観。1996年撮影 [写真：村井 修]
- 2 コンペ案段階の全体模型。2棟をスカイコリドールがつなぐデザイン [写真：堀内広治]
- 3 模型を確認する丹下健三 [写真：「SD別冊29号：フジテレビ本社ビルの記録」鹿島出版会、1996より]

負のプロセスで、設計が行われていました。今は模型の代わりにコンピュータを使った作業になるケースも多いですけど、基本的なプロセスは変わっていません。

最終的に提出した事業コンペ案は、ミラーガラスのカーテンウォールで覆われた2棟をエキスパンション・ジョイントを介してブリッジがたぐデザインでした。そして球体の展望室は、フジテレビを象徴するものとして目玉のマークを模した形がい

いだろうということでも生まれたものです。その後、基本設計の段階で変更が発生します。そのきっかけは、構造設計を担当した小堀鐸二

研究所の播繁さん(1938-2017)の一言でした。「本当はこれ、ひとつの建物にしたいんでしょ? 丹下先生もそう考えているのではないかしら」。

コンペ案もこれはこれで素直な設計だったのですが、メディア企業のアクティブなイメージを伝えるには、全体がひとつの建物として感じられるデザインの方が確かに望ましい。構造家の播さんが、設計者の考えを深いところで理解して、実現案へと発展しました。

さかのばれば、国立代々木競技場のときもそうでした。アスリートと観客が一体となれる空間がどうしたらつくられるか、構造家の坪井善勝先生(1907-1990)と父が侃々諤々、議論をして、その結

果、あの吊り構造による大空間が生まれたわけです。構造家とのコラボレーションは、父にとって設計の大きなポイントでした。

### 「集大成」の思いを込めて

フジテレビ本社ビルの完成が間近に迫ったころ、とても印象的な出来事がありました。父があるインタビューを受けたときのことで。私も同席していましたが、インタビューの途中で、父が「これは私の集大成です」と言い出し、このプロジェクトを説明したのです。

それが意味するのは、父が1960年代から提案してきたさまざまな都市計画との関連です。父は1961(昭和36)年に、都市機能を東京湾に延ばしていく「東京計画1960」を発表し、1986(昭和61)年にはその改訂版である「東京計画1986」を作成しました。また1964(昭和39)年の「築地再開発計画」では、3次元のコミュニケーションシステムを具現化した立体格子状の都市を提案しています。これまでのプロジェクトを通じてずっと考えてきたことが、東京計画の軸線上ともいうべき東京湾の埋め立て地に建つフジテレビ本社ビルに実現されている、と明かしたのです。

もちろん私は、父が東京湾に対して強い思い

入れを持っていることを知っていました。有楽町にあった都庁もいったんは西側の新宿へと移りましたが、「いつかまた東京湾の方に戻ってくる」とも言っていました。

しかし「フジテレビ本社ビル」について事務所のなかでディスカッションしているときには、東京計画のことなどは一度も口にしませんでした。ですから、これを聞いたときは、とてもびっくりしたのです。

同時に、そういう思いで父が取り組んだ建物に担当者としてかかわれたのは、息子として最高のポジションを与えられたのかと、うれしく感じました。

### 晩年の父からの問いかけ

父は60代で大病をし、それからは時々、入退院を繰り返すことがありました。自らの入院体験によって、父は病院に非常に興味をもつようになっていました。そうしたなかで、「君津中央病院」(2003)と「癌研究会有明病院」(2005)という、2つの病院建築を事務所で手がけました。病院は、医者と看護師の使い勝手から設計が決まりがちですが、父は患者や患者の家族の目線で病院を見ることの大切さを言っていました。その考え



1



2



3

方から、君津中央病院では「美しい病院」、有明病院では「明るい病院」という方針が打ち出され、設計を進めました。父が患者として感じたことが、病院の設計に活かされたのです。そして、父の生前最後の現場になったのが「有明病院」でした。これもまた、最晩年の思い出深いプロジェクトです。

また、このようなエピソードもありました。最終的に実現はしなかったのですが、ヨーロッパの海辺のリゾート地の建物の設計をしたときのことで。設計チームは地域柄必要と思い、バルコニー付きのデザインを進めていました。建築主へのプレゼンテーションもそれで通っていたのですが、あるときそれを見た父が、「この建築に水平線はいりません。垂直線を強調したいんです」と言い、そのバルコニーを全部外してしまいました。所内では、「うちの事務所ではクライアントが2人いる。本当のお施主さんと、丹下健三という美と建築を最後までとことん追求する建築主だ」——そんなことも言われました。

しかし父は、基本的にはクライアントの話をよく聞く人でした。直接、会って話が聞ければそれでいいのですが、晩年になってからの海外の仕事だと、なかなかそうもいきません。私や他の所員

が出かけていって、代わりに聞いてそれを報告することになります。そうした際に、私たちも自分の意見を交えて言ってしまうことがありました。それを父は極端に嫌がりました。「お客さまが本当に言っていることはなんですか、あなたはそれを脚色していませんか?」。そう問いかけるのです。

できるだけ多くの情報を入れる。そうすれば必ず正しい判断ができます。でも情報が欠けていると、正しい判断ができない。あのころ父が言っていたのはそういうことだったのだと、今自分が設計事務所を率いる立場になってみて、よくわかるようになりました。

- 1 東京計画1960 [写真: 川澄明男]
- 2 築地再開発計画 [写真: 村井 修]
- 3 フジテレビ本社ビル空撮。1996年撮影。手前にはレインボーブリッジ、奥にはテレコムセンターが見える [写真: 三輪晃久 写真研究所]

### フジテレビ本社ビル

所在地 | 東京都港区台場2-4-8  
設計監理 | 丹下健三・都市・建築設計研究所  
施工 | 鹿島建設  
構造 | 鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造  
階数 | 地上25階、地下2階  
延床面積 | 141,825㎡  
竣工 | 1996年

### 丹下憲孝 たんげ・のりたか

丹下都市建築設計会長 / 1958年東京都生まれ。1985年ハーバード大学大学院建築学専門課程修了後、丹下健三・都市・建築設計研究所入所。1997年同社代表取締役社長。2002年丹下都市建築設計を設立。2016年より現職。主な作品に、「モード学園コクーンタワー」(2008)、「オーチャードゲートウェイ」(2014)がある。

### 磯 達雄 いそ・たつお

建築ジャーナリスト / 略歴は17ページ参照

## 新世代・事務所訪問 | 06 大室アトリエ / atelier Íchiku

ナビゲーター | 門脇耕三 (明治大学専任講師)

次世代のプロジェクトが胎動する、建築家のワークスペースを訪ねるシリーズ。そこで展開している活動の、あるいは生き方の独自のスタンスに触れながら、新しい建築の姿を捉えていく。

### 現代の建築に規律正しさを

大室佑介が設計した、左右対称で凜としたたずまいの建物を見て、アメリカの絵本作家が描いたある家のことを思い出した。作家はバージニア・リー・バートン、絵本は『ちいさいおうち』で、そこには大室の作品と少しだけ似た、左右対称のかわいらしい家が登場する。その家もやはり凜としていて、周囲が田園から大都会へと大きく変貌しても、お構いなしに同じ場所に立ち続けるのだが、まわりの変化にも揺るがない、この小さな家もつ強さは、その左右対称の姿とおそらく無関係ではない。シンメトリーとはつまり、外部からは根拠づけられない、建物そのものが内在する存在原理の表れなのだ。シンメトリーに強くこだわる大室が、建築を通じて試みていることも、周囲の変化に揺らがない場所の構築に違いない。一見すると突飛な活動に思える農村の私設「美術館」も、都会の大きな美術館とは違って、時代やマーケットに翻弄されることのない、アートにとっての安住の場所をつくる試みだといえるだろう。誰かにとっての確固たる場所をつくること——大室が向き合っているのは、建築家にとってのひとつの究極の目標である。(門脇耕三)

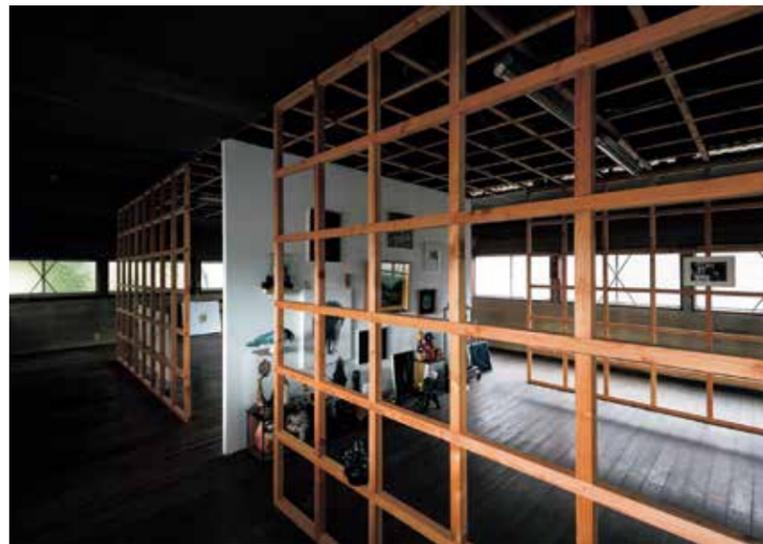


## 私立大室美術館 (本館・分館)

大室佑介が館長を務める私設美術館。住まいに隣接する空き家となっていた犬の首輪工場と農機具倉庫を改修して、それぞれ本館と分館としている。本館は、天井の一部を剥がして現した木格子と中央の白い展示壁だけの状態からスタートし、展示の入替えとともに木格子の展示壁が増設された。分館では、既存倉庫の内側に箱を挿入し、周囲を回廊、箱の中を展示空間としている。



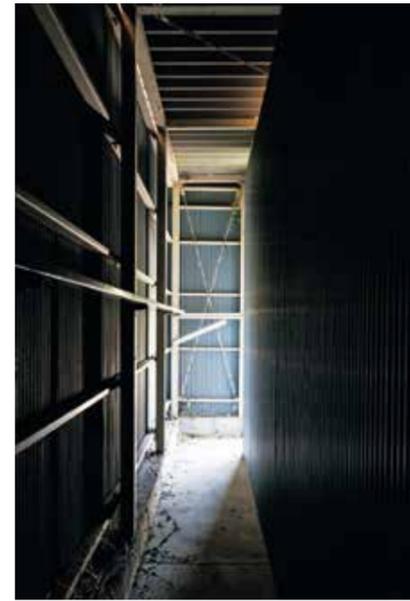
1



2



3



4



5

- 1 本館展示空間。まず第1期として中央の白い壁と天井の木格子の状態がつけられ、その後、第2期として天井野縁にあわせた格子状の展示壁を点対称に4枚設置している
- 2 本館回廊。格子壁を設置したことで、展示室と回廊という構成が生まれた。外周の既存の型板ガラスの窓からは柔らかな自然光が入る
- 3 本館受付。過去に展示をした作家の作品集などが並ぶ
- 4 分館回廊。入り口から回廊をまわり裏側から展示室に入る。常設作品の性質から採光は制限され光量が絞られている
- 5 分館展示空間。展示室奥の上部に入ったスリットから柔らかな反射光が入り、分館の常設展、彫刻家・橋本雅也の作品「片影」が暗闇にうっすらと浮かび上がる。展示空間の箱の外側はトタンの波板張り、内側は左官仕上げ
- 6 本館外観。現代美術館とは一見わからないトタンの外観
- 7 分館外観。奥には本館が見える



6



7

建築家・大室佑介は、彫刻家である妻の制作環境を確保するために、結婚を機に東京から三重県津市白山町の農村に移住を決めた。義理の祖父が暮らしていた住まいを夫婦の生活と制作の新たな拠点としながら、そこで地域に根を下ろした、建築と美術が交差する活動を始めている。

私立大室美術館は、大室自身が館長を務める私設の美術館だ。住まいを中心に、所有する敷地内に点在している町工場(本館)や倉庫(分館)を、最小限の手数とコストで改修し、展示空間として再生している。ここでは1作家1空間を原則に、大室が気に入った美術家の作品のための空間を、大室自身が(ときには手作業で)つくりあげていく。美術マーケットに翻弄されない、作家と作品のためだけにある場所が目指されている。

現在(2018年12月)の入館料は300円で、近隣居住者と高校生以下は無料。展示作品が購入された場合は売上げの大部分が作家に還元される。今後も、作家の展示にあわせて段階的に増改築を繰り返していく予定だ。

1981年  
東京都練馬区にて生まれる

2005年  
多摩美術大学環境デザイン学科卒業

2007年  
多摩美術大学大学院美術研究科修了

2007-09年  
磯崎新アトリエに勤務

2009年  
大室アトリエ/atelier íchikuを設立

2014年  
三重県津市へ移住

2015年  
私立大室美術館開館。館長に就任

事務所概要

【私立大室美術館（本館・分館）】

所在地 | 三重県津市白山町川口

所有形態 | 持主

竣工 | 1970年代（改修 | 2015年-）

構造 | 鉄骨造

敷地面積 | 不明

建築面積・延床面積 | 120.9㎡ + ポーチ24.84㎡（本館）/ 26.49㎡（分館）

【ワークスペース】

竣工 | 1999年

構造 | 木造

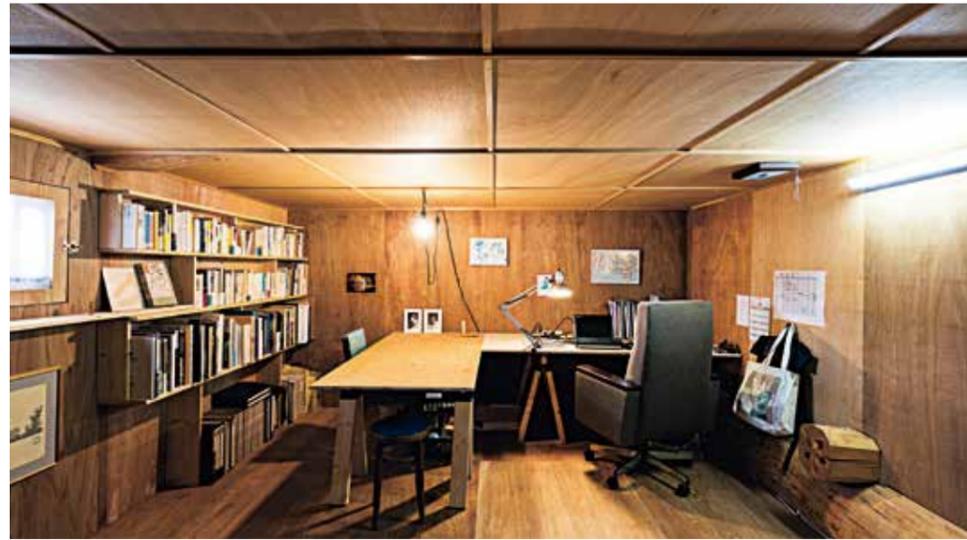
敷地面積 | 不明

建築面積 | 149.06㎡

延床面積 | 165.62㎡

## 建築家のアトリエ

義理の祖父が暮らしていた住まいの屋根裏部屋を利用してワークスペースとしている。低く抑えられた天井や小窓など、私小説家・川崎長太郎の物置小屋のような執務空間となっている。



1



2



3

- 1 ワークスペース内観。高さ方向のスケールが絞り込まれた空間（天井高さ約1,800mm）に、最小限の本棚、模型棚、椅子、作業台などが配置されている
- 2 模型棚。竣工した建築はすべて同素材・同スケール（1/100）で模型を再制作する
- 3 住まいの外観。手前上部の白い小窓のある部分がワークスペース

### 大室佑介氏によるワークプレイスのスケッチ



### 対談

## 地方を背にして見据える現代の規律と調和

### 大室佑介 × 門脇耕三

#### ショップデザインへの興味から建築の道へ

**門脇** まずは生い立ちからお聞かせください。  
**大室** 東京練馬の住宅地で生まれ育ちました。中学ではボクシングを、高校では当時流行の裏原宿へよく行き、Tシャツをつくって売ってしていました。かなりミーハーな若者でしたが、好奇心が強く、何でもやってみるタイプでした。そしてショップデザインへの興味から多摩美術大学の環境デザイン学科に進みます。

**門脇** 当時から建築家になるという意識はありましたか？

**大室** 大学1年生のころに『カーサ・ブルータス』でフランク・ゲーリーを見て建築家になりたいと思いました。まだミーハーですね（笑）。2年生のころから建築の本を読み始め、3年生の課題で、多摩美の教授で批評家の飯島洋一さんに出会い、建築の歴史と理論の基礎を叩き込まれました。

**門脇** 卒業設計はどのような内容でしたか？

**大室** スペインのゲルニカに、ピカソの「ゲルニカ」のための美術館・資料館・図書館・公園の記念碑的複合施設を計画しました。当時（2005年）はせんだいデザインリーグ「卒業設計日本一決定戦」が始まって3年目で、飯島さんからは「一等をとらなきゃだめだよ」と言われていました。結果は見事に一等でしたね（笑）。

#### ドイツ記念碑の研究

**大室** 大学院進学後も、記念碑・記念建造物の研究を続けました。主にドイツを対象に、碑・建造物とそれに付随するテキスト（展示キャプションや資料館のパフレット）から分析していきました。ドイツは第二次世界大戦で重い十字架を背負ってしまった国なので、あらゆるものごとについての記念建造物が国を挙げて数多くつくられています。

**門脇** 建物に記念碑性を帯びさせる建築手法とはどのようなものですか？

**大室** やはりスケールは大切ですね。たとえば、



人間が入れるか入れないかという寸法の、いわば魂の抜け穴といえる開口部が重要だったりします。内側をもたない記念碑は外側から体感するしかないので、どうしても視覚に頼らざるをえません。視覚から荘厳さを抱いたり、安らかになったり、アドルフ・ロースの言葉を借りれば襟を正したり……。そのためには比率やシンメトリーといった古典的な要素は必須なのだ学びました。

**門脇** 「記念する」という機能を建築の外観だけで実現するということですね。エジプトのピラミッドでも同じことが達成されていますが、そう考えると記念碑は、建築のもっとも根源的な要素を備えた構築物とも言えそうです。とくに影響を受けた建築はありますか？

**大室** ベルリンの「ノイエ・ヴァッヘ」ですね。カール・フリードリヒ・シンケルが設計した衛兵所を、ハインリヒ・テッセナウが記念建造物へと改修しました。内部空間をもちながら記念碑性が担保された奇跡的な建築だと思います。

#### 詩人・平出隆との出会いと独立

**大室** 大学院ではもうひとつ重要な出会いがありました。大学院になると各学科数人ずつの少人数になるので、ほかの学科にふらふらと遊びに行くようになりました。そこで足繁く通っ

たのが芸術学専攻の平出隆研究室です。平出さんは詩人で小説家で、散文を通して本当の詩とは何かを追求している方です。それまでは建築の本しか読んでいなかったのですが、平出さんに出会ってからヴァルター・ベンヤミンや私小説家の川崎長太郎<sup>01</sup>を知り、それを軸に哲学・歴史・文学に読書の幅が広がっていきました。それから時を経て、2015年に小田原文学館で川崎長太郎展が行われた際にも平出さんにお声がけいただき、川崎長太郎が住んでいた物置小屋の再建計画にも携わりました。

**門脇** 卒業後、社会に出るわけですが、どのような仕事からスタートしましたか？

**大室** 磯崎アトリエにプロジェクト契約で入所したのですが、現場が少ない時期で、いつ実現するかわからない建物の図面をひたすら描くという時間を過ごしていました。そうこうしているうちに、平出さんからの紹介で三重県鳥羽市に詩人・伊良子清白の家を移築して記念館をつくる話をいただきました。当初は勤めながら週末だけ鳥羽に通っていたのですが、やがて退職をして鳥羽の現場に通い詰めるようになりました。そこで基礎の打ち方や、木造の組み立て方について現場で学ぶことができました。ちなみに最初の仕事に移築だったので、平出さんに「atelier íchiku」という事務所名を付けていただきました。

**門脇** 図面は磯崎アトリエで覚えて、建物のつくり方は鳥羽の現場で学んだんですね。その後はどのような仕事をされたのでしょうか。  
**大室** それはもう、続くわけもなく……。本棚をつくるような小さな仕事で食いつないでいきながら、やがて同級生が出す店舗の内装設計を頼まれるようになっていきました。時間をもて余していたので、そのころ調べていた川崎長太郎の住んでいた物置小屋に触発され、固定資産税の軽減も目論んで、実家の空き地に自邸のつもりで小屋を建てて暮らしてみたり(笑)。そんな活動を2-3年続けていました。

## HAUS-004 ——シュムメトリアの実践

**門脇** 大室さんといえば左右対称の設計が特徴的ですよ。  
**大室** 今思うと修士設計で既にシンメトリーが出てきていたので、かれこれ10年以上使ってきていることになりますね。  
**門脇** 修士のころにどのような原理や手法を見出したのですか。  
**大室** 記念碑や記念建造物の場合、主題となる人は亡くなっていることが多いので、そうなる必然性から組み立てるしかありません。いま手がけている住宅の設計でも、依頼内容や与件から組み立てて、当然の与件に当然の形としての比例やシンメトリーを与えています。これらの必然性に従って設計をしてゆけば、記念

碑と同じように現在のプロジェクトも扱えるのではないかと考えています。  
**門脇** 設計の与件だけでなく、建築が備えるべき比率や比例も、大室さんにとっては同じく必然性を備えていて、両者は対応し得るということですね。そうした必然性にもとづいて建築を組み立てていけば、俗な事柄に流されない強い建物になる。与件を押さえることは当然として、そこに超越的な必然性に加え、建物を揺るがない存在とするために、建築家は比例やシンメトリーを考えるべきだと。  
**大室** そういことです。それこそが建築の表現なのだと思います。  
**門脇** 建築が本来備えておくべきことについて考えられているのですね。このことを、実際のプロジェクトで説明していただけますか。  
**大室** 「HAUS-004」は、祖父が亡くなったあとに相続税を支払うためにと用意してくれていた土地に建てた建売住宅です。土地だけで売ることができたのですが、建築家としては、自分で建売住宅の設計案をつくり不動産屋に話を持ちかけることで、設計料も入るし、緑のある土地に自分の建築もできるしいいのではないかと考えました。家族も了承してくれて、平面図を用意して不動産屋に話を持ち込んだのです。デベロッパーからは標準仕様を守って欲しいと言われ、駐車場の数、リビングの大きさ、バルコニーの向きと数や部屋数などについて、細かく要件を与えられました。それらをすべてのんだうで設計したものが「HAUS-004」です。

**門脇** 建売の条件をのむには抵抗のある建築家が多いと思いますが、そこは問題ありませんでしたか？  
**大室** 建築がシュムメトリアを保持していれば問題ありません。シュムメトリアとは一言でいうと規律です。本来は寸法的な調和という意味ですが、あくまで規律と読み替えると、現代における規律とは何かという問題にも通じます。古典的な規律(比例やシンメトリー)と現代の規律(経済性や要件)を調停した結果が「HAUS-004」であるとも言えます。現代では経済的な部分にも調和が必要だし、建売の要件を引き受けることも調和のうちです。むしろ建築とは、建売という条件や一般建材を用いることで価値を貶められることのないものだと考えています。  
**門脇** いろいろな要求がしっかり整理されて、それらが必然性から組み立てられた状態が調和と規律のある状態だと考えているわけですね。出来上がってみてどうでしたか？  
**大室** 良い建物ですよ(笑)、正面に立つと「整っているな」と感じます。先程のロースの言葉を使えば、襟を正す気持ちになる。現在では、大きくつくったリビングで子どもたちが集まって遊んでいるという話も聞いたので、場所としてもしっかりと機能しているようです。

## 私立大室美術館 ——美術とともにある生活

**門脇** ところで、なぜ三重に移住することに

なったのですか？  
**大室** 彫刻家の妻がドイツから帰国して制作場所を都内で探したのですが、なかなか良い場所が見つからなかったのが、妻の祖父が持っていた三重県白山町の空き家に引越して、それぞれ仕事(制作)をしながら暮らす選択をしました。練馬の実家にもアトリエを残していたので、初めのころは行き来していましたが、子どもが生まれてからは三重中心の生活になっています。  
**門脇** 三重でのたいへんユニークな活動に「私立大室美術館」があります。なぜご自身で美術館をつろうと考えたのでしょうか？  
**大室** 2015年にドイツ人とイタリア人の画家が遊びに来て、離れに長期滞在しながら作品を描きためていました。そのとき、せっかくだからと家の隣の倉庫をきれいにして天井を一部抜き、中央に白い壁を1枚立て、2人の作品を展示するための「美術館」を準備したのがきっかけでした。  
**門脇** 現在はどのように運営しているのですか？  
**大室** 年に数回の展示期間中は一般入館料を300円、地域の方は無料で運営しています。2年目に格子の壁を追加した際に「毎年こうして拡張していけたら面白いな」と考えはじめて、入館料を貯蓄して1年に1棟ずつ増殖させていきたいと考えています。今は自宅の一部を使って一人の作家の作品だけを展示・販売する「大室画廊」に改装中です。10年経てば

10棟増えるので、それらすべてを巡る全館入場フリーパス券をつくったり、海外に分館をつくることで海外から三重に人が来る状況をつくれたら面白いですよ。  
**門脇** 建築家の大室さんが展示空間を用意して、その対価として美術家の作品が置かれていく。そこに来場者が訪れることで美術館が拡張していき、場合によっては作品の購入者が現れて作家にも還元されていく。既存の美術市場の仕組みとは異なるメカニズムをもった循環がつくられています。  
**大室** 小さな循環ですよ。作家たちも市場から離れた環境で制作したい意思はあるものの、そうした場所や可能性はどんどん狭まっているのが現状です。作家にとって作品は本来もっとラフに扱ってもいいものであって、ただつくりたいという作家の欲求を喚起させる美術館になるといいなと思っています。

## 片隅を背に明るいところを見る

**門脇** 経済や市場に翻弄されない場所の構築を目指しているように感じます。過去に小屋をつくってきたことや、現在地方で活動していることも関係していますか？  
**大室** 小屋には光が届かない暗闇が存在します。その光の当たらない片隅に、小屋に住む人は自らの身体を置くことができる。光の当たる場所から暗い片隅を見るのではなく、片隅にいなから明るい方を見ること。つまり、今こ

でやっていることは、都市に背を向けているのではなく、片隅を背負いながら都市を見ているといえます。そう考えると、ただ地方に引きこもって好きなことをやっているのではなく、あくまでも現代を見据えたうえで、地方を背負いながら活動をしている。その感覚の方が近いですね。  
**門脇** ここを訪れるアーティストや来訪者に対して、片隅を背にして自分が来た世界を見返す機会を与えることも、この美術館の活動のひとつなんですね。こうした片隅が世界中に広がるといいですね。  
**大室** 明るいところにいると暗闇に目が慣れるまで時間がかかりますが、暗いところになれば明るいところはすぐに見えますからね。

**01** 川崎長太郎(1901-1985)。トタン屋根の物置小屋で寝起きしながら執筆活動を続けていたとされる、小田原出身の小説家。大室は、この物置小屋の再建計画を手がけている

**門脇耕三** かどわき・こうぞう  
建築家・明治大学専任講師/1977年神奈川県生まれ。2000年東京都立大学工学部建築学科卒業。2001年同大学院修士課程修了。首都大学東京助教などを経て、2012年より明治大学理工学部建築学科専任講師。博士(工学)。近著に、『「シェア」の思想/または愛と制度と空間の関係』(LIXIL出版、2015)など。

**和田隆介** わだ・りゅうすけ  
編集者/1984年静岡県生まれ。2010年千葉大学大学院修士課程修了。2010-2013年新建築社勤務。JA編集部、a+u編集部、住宅特集編集部に在籍。2013年よりフリーランス。2018年より明治大学大学院博士後期課程在籍。主なプロジェクトに、『LOG/OUT magazine』(RAD、2016より)の編集・出版事業など。



桜台：建売住宅 | HAUS-004 (2015年/左)  
東京の練馬区桜台に立つ2階建ての建売住宅。工務店の標準仕様を受け入れながら不動産的な要件もすべて満たしたうえで、比例とシンメトリーを調整することで建物全体に規律を与えている。限定された範囲内で選択された外装材により周囲のまち並みと同化しながらも、そのたずまいは何か異彩を放っている【写真：若林勇人】

白山町：珈琲豆店 | HAUS-006 (2018年/上)  
私立大室美術館からほど近い谷間の住宅地のエッジに立つ珈琲豆店。宅地化が進む風景の中であえて住宅地側には背を向け、変わらない山側の風景に向かって開口や庭を設けている。建物はシンメトリーで構成され、制作したスチールサッシによる開口が均等に割り付けられている。内外装ともに白い漆喰仕上げ



四日市：住宅 | HAUS-007 (2018年)  
三重県四日市に立つ、子育てを終えた夫婦のための平屋の住宅。ここでも、ハウスメーカーの標準仕様をもとに設計を進めながら、施主の与件から諸室をシンメトリーに配置していった。勾配屋根の架かる中央の大きなリビングでは、勾配の切り替えに合わせて天井を操作しながら空間を分節している。内外装はともに白い漆喰仕上げ



大室佑介氏のある日のスケジュール	
6:30	起床・雑務
7:30	子ども起床・朝食
8:30	子どもを保育園に連れて行く
9:00	始業
12:00	自宅1階で妻と昼食
13:00	近所の珈琲屋へ
13:30	仕事・打ち合わせ・草刈り
17:00	子どもを保育園へ迎えに行く
19:00	夕食
21:00	寝かしつけ・就寝
24:00	起床して仕事・読書
27:30	就寝

白山町に移住したことで、子どもが生まれたことにもない、夜間に散歩くことのない規則正しい生活を送っている。寝かしつけと同時に寝てしまうことが多いため、睡眠を2回に分けることを習慣づけた。

構造は無数に解があります。

条件次第でその解が変わるので、常にこれが「正解だ」とは思わないようにしています。

そういう姿勢で設計していると、より良い選択肢を発見できると考えています。——大野博史

取材・文 | 加藤 純



側面からの外観。斜め格子のアウトフレーム内部にインナーフレームが見える [写真: 石田 篤]

## 構造家の新発想 | 06 大野博史

### 構造のラストピースを見つける

建築家の発想を構造家が実現化させる。

そのようなコラボレーションで建築の世界を広げている大野博史。

建築家の発想はもちろんユニークだが、それを構造化する作業は単なる技術の適応ではなく、まったく別のユニークな発想を引き出すことにある。そのことを教えてくれるのが、今回の新発想だ。

大野博史 おおの・ひろふみ  
1974年大分県生まれ。1997年日本大学理工学部建築学科卒業。1998-1999年ユーゴスラビアENERGOPROJEKTにて海外研修。2000年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了。池田昌弘建築研究所を経て、2005年にオーノJAPANを設立。2013年より日本女子大学非常勤講師。

加藤 純 かとう・じゅん  
建築ジャーナリスト、ライター・エディター/1974年生まれ。1999年東京理科大学工学研究科建築学専攻修士課程修了後、建築知識(現・エクスマレッジ)月刊「建築知識」編集部を経て、2004年よりフリーランス。CONTEXT主宰、石巻工房設立メンバー。

## 構造を完成させるもうひとつの架構

富岡商工会議所会館@群馬県富岡市

構造を成立させるとき、建築家の発想にひとつ足りないもの、そのラストピースを見つけてピタッと嵌めるような解を出すのが構造家の大野氏だ。

この建築は当初から大胆な斜め格子がデザインの核になっていた。切り妻屋根が連続する山型から導かれた壁面の格子だ。富岡製糸場のトラス屋根もイメージされている。しかし実はこの形はトラスではなく、パンタグラフなので変形してしまう。ならば別の架構に変更?と思いきや、原形を変えずに、大野氏はもうひとつの架構を加えた。

2階床を支える柱梁を「インナーフレーム」として利用しました。斜め格子と一体化することでパンタグラフをトラス化することが可能です。インナーフレームをオフセットして配置することで斜め格子の印象を残すことができます。

斜め格子の壁と屋根面で構成される「アウトフレーム」は長手方向の耐震要素と水平剛床として機能。「インナーフレーム」は柱梁で床荷重を支えて方杖で地震力を負担する。多くの部材が接合する部分では、プレートの接合金物を使用。170mm角のベイマツ集成材に設けたスリットに差し込み、ボルト留めた。この建築にはインナーフレームの入っていない部分が1カ所ある。吹き抜けの大ホールで、広い壁面には補強構造がない。そこで大きな風圧にも耐えるよう、壁の斜め格子を互いに寄りかかり合う「レシプロカル構造」にしたのも新発想だ。

そもそも長い連続材を手に入れるのは難しいので、途中で切る必要がありました。そこで、3本あるいは4本の部材が互いに互いを支え合って安定するレシプロカル構造を採用しました。そうすることで剛接合にしくなくても、ホゾ加工をした受け材にもう一方の部材を差すピン接合で応力が伝達し、長いスパンを飛ばすことができます。

フレームの追加や接合方式の提案。決して手が込んだ解き方ではないが、ひとつの気づきが状況を大きく変えるのが、大野氏の発想だ。

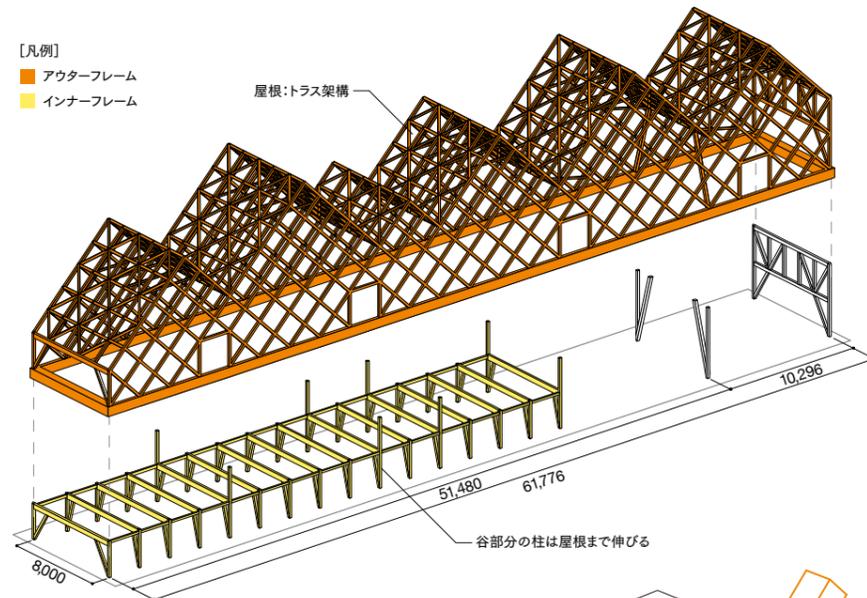


- 1 建設中の様子。アウトフレームの建て方を行いつつ、写真中央左手に見えるインナーフレームと接続した [写真: 手塚建築研究所]
- 2 建物全体の構造ダイアグラム [提供: オーノJAPAN]
- 3 アウトフレームとインナーフレームの接続部 [提供: オーノJAPAN]
- 4 6方向からの部材を受けもつ、特注のガセットプレート。木材に切った溝に差し込むことで、プレートの露出を防いだ [提供: オーノJAPAN]
- 5 大ホール内観。斜め格子の交点にホゾを設けてピン接合する [写真: 石田 篤]

1

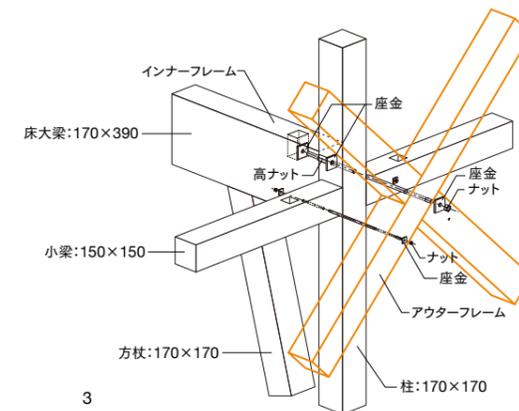
【凡例】

- アウトフレーム
- インナーフレーム

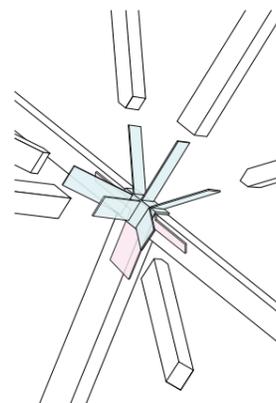


2

主要用途 | 事務所  
設計 | 手塚貴晴+手塚由比+矢部啓嗣/  
手塚建築研究所  
構造設計 | オーノJAPAN  
延床面積 | 801.64㎡  
主体構造 | 木造(ベイマツ集成材)  
竣工 | 2018年5月



3



4



5

## 無数の解の ひとつを選ぶ

「現在の常識を疑い、できるだけ頭を真っさらにしてプロジェクトにかかわりたい」と言う大野氏は構造設計のアプローチそのもののあり方を探る。

人が乗るとゆらゆらと動く、薄いチューブ。アートイベントのパビリオン「ぼよん土管」は、鋼板の管状の構造物だ。大地も風も動くことを受け入れ、抗わずに揺れる建築が追求された。

施工の簡易化がひとつのテーマでした。そのため軽量化を図り、まずは2.3mmの鋼板を使って解析しました。薄いほど軽量ですが、やり過ぎると補強リブが必要になって施工が複雑になります。逆に鋼板を厚くすることも検討。その最適解は、製作者も交え実物大実験を行ったときに得られました。結局、製作精度の信頼性の高い板厚を厚くする案を採用。厚さは16mm。管3つをボルトでつなげてそれを12mmに。さらに全体を15%縮小して9mmに削減できました。揺れるよう剛性を極端に低くしています。

解のラストピースは現場で見つけることもある。

構造はスケールによってプロポーションが変わる。アリと象の脚のプロポーションの違いはサイズの違いからきているのだ。アリを象くらいに拡大すると、あの脚の形では立てなくなる。その問題に着目したのが、巨大な椅子のオブジェ「CH/air」。イベントのインフォメーションプレイスに設置された。

巨大化しても同じプロポーションを保つには、根本的に違う構造、素材にする必要があります。そこで中空の立体トラスを考えました。細いアルミ線材を山形にプレスし、交互にボルト締めして立体トラスを形成します。単位容積あたりの重量は、木や樹脂の椅子よりはるかに小さい構造です。一方、風で浮き上がらない重量が必要で、ピースのサイズと組み合わせ方を考えました。

しかしこれは巨大イシ形をつくるという条件に対する、無数にある最適解のひとつ。その落としどころを見つけ、「解けた」感覚が得られた事例だ。

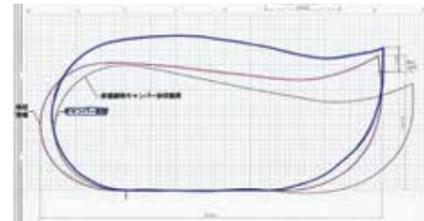
ぼよん土管 (A&A TUBE) @ 岡山県岡山市



1



2



3

主要用途 | 遊具  
設計 | 青木淳建築計画事務所  
構造設計 | オノJAPAN  
主体構造 | 鉄骨造  
竣工 | 2016年9月

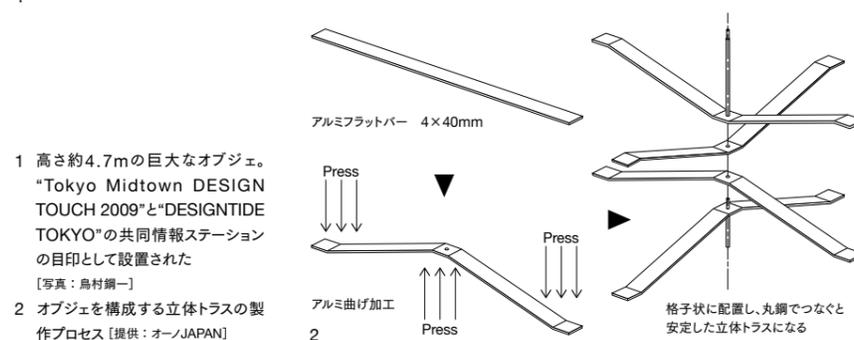
- 1 厚さ6-9mmの3つのチューブがボルトで連結され、連動して揺れ動く。「岡山芸術交流2016」にあわせて設置された [写真: 品川雅俊]
- 2 運搬サイズの問題から、各チューブは幅1.5mずつに3分割し、高さ方向をつぶした状態で運んだ。現場で3つを接合することで幅を4.5mとしている。キャンパー形状は自重でつぶれることで当初の形になるよう計算されている [写真: オノJAPAN]
- 3 非連結時、連結時、輸送時、それぞれの変形量 [提供: オノJAPAN]

CH/air @ 東京都港区

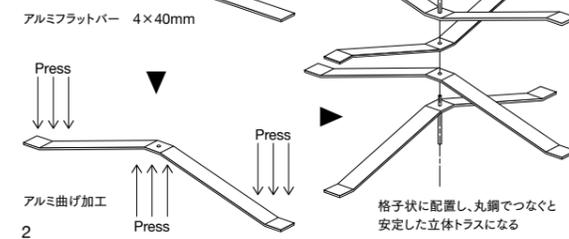


1

主要用途 | オブジェ  
設計・構造設計 | オノJAPAN  
主体構造 | 鉄骨造+アルミ造  
竣工 | 2009年10月



- 1 高さ約4.7mの巨大なオブジェ。「Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2009」と「DESIGN TIDE TOKYO」の共同情報ステーションの目印として設置された [写真: 島村綱一]
- 2 オブジェを構成する立体トラスの製作プロセス [提供: オノJAPAN]



## INSPIRATION | 構造家のリスペクト

発想の原点がここにある。構造家がリスペクトする歴史的構造物のひとつ

### コンクリートを曲げるという発想

[ザルギナトール橋]

@ スイス

設計: ロベール・マイヤール

竣工: 1930年



両端の橋脚の根元と、橋梁中央にヒンジをもつ3ヒンジアーチ構造 [写真: オノJAPAN]

大野氏が構造力学の魅力に目覚めるきっかけとなったのが、「近代コンクリートアーチ橋の草分け的存在」とされる橋梁技師のロベール・マイヤールによるザルギナトール橋である。

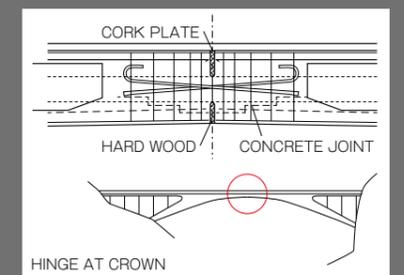
RC造でピン接合はあり得ないというのは常識です。ところがコンクリートにヒンジを配置することを前提とした構造がこの橋です。ヒンジ部分は鉄筋をクロスさせ、コンクリートの中に木片とコルクを埋め込んで断面欠損を大きくして、その部分で回転を可能にしています。その原始的なアイデアに魅力を感じます。橋の中央と両端にヒンジをもつ3ヒンジ

アーチとすることで軽快なフォルムを実現しています。建築雑誌で写真を目にして、授業で学んできた構造力学が、建造物の形状を決める大きな要因になることを再認識しました。

マイヤールは、伝統的な組積アーチ橋や鉄骨造による橋の形式や形状にとらわれることなく、RC造の可能性を追求し、斬新な美学を生み出した。橋長が約132m、幅員3.5m、アーチスパンは約90mのこの橋はスイスの渓谷にかかり、歩行者だけでなく自動車も通れる道路橋として現在も使用されている。

構造そのものの美しさが、この橋では現れています。建築の場合、構造がそ

のまま現れることは稀ですから、それ自体で美しさを表現するのは難しいでしょう。ただ、建築のあり方に一致するような構造のあり方を常に意識して設計をしています。



橋桁中央部分断面図。切り欠かれた部分には木片とコルクが埋め込まれている

# 触覚デザイン | 03 白井晟一のドアハンドル

ナビゲーター | 笠原一人 (京都工芸繊維大学助教)  
制作協力 | 白井原太 (白井晟一建築研究所)

## 人と向かい合うオブジェ

建築には人が直接手で触れる部位がある。  
それは建築の最もダイナミックなところであり、人と建築の関係が最も濃厚に築かれるところ。  
視覚ばかりでなく、触覚にも訴える建築デザイン。  
そのあり方を模索してたどり着いた、建築家のひとつの答えを見てゆこう。  
第3回は白井晟一のドアハンドル。  
それは開け閉めの機能を全うするだけのものではなく、  
人と対面して関係を築く、ひとつの独立したオブジェ。

白井晟一 しらい・せいいち  
建築家 (1905-1983) / 京都府生まれ。モダニズム建築全盛の時代に、様式にとらわれない独自の建築を追求した。1928年京都高等工芸学校 (現・京都工芸繊維大学) 図案科卒業後、ドイツのハイデルベルク大学で哲学を学び、建築にも触れた。帰国後、義兄の自邸設計を手伝い、建築の道に入る。

取材・文 | 平塚 桂  
写真 | 小松正樹

- 1-2 特別室の扉。ドアの中心にノブが取り付けられている。体をひねることなく、ドアに正対したまま入室できる
- 3 同ドアノブ。ドイツ創業のシュラーゲ社製。直径75mm
- 4 エントランスのドアノブ。老舗金物メーカーの堀商店に特注したもので、館内の多くのドアで使用。一般的なノブよりも一回り大きく、直径75mm、ノブの厚みは25mm
- 5 同扉・外側
- 6 美術館正門のドアノブ
- 7 同門・外側



2



3



4



5

大地と密着するように立つ、石積みの美術館。池越しの回廊の奥に最も重要な空間が現れるという形式は「古代ローマ時代の古い邸宅を思わせる」と笠原氏。そのなかでも笠原氏が注目するのが、特別室扉の中央に取り付けられたドイツ創業のシュラーゲ社のドアノブだ。

「中央にノブがある扉は、イタリアの住宅などにもしばしば見かけられます。中央に何かがあるというのは、西洋の古典建築の作法として重要で、扉に正対する効果がある。白井の着想の源には、こうしたヨーロッパの扉があったのかもしれませんが」と笠原氏は言う。中央にノブを据えた扉は、白井は「虚白庵」(1970)や「善照寺本堂」(1958)にも用いている。エントランスには、十字を切るような縁取りのついたアーチ状の扉がある。ドアノブは建築金物・錠前メーカーの堀商店への特注品。「直径がシュラーゲ社のノブと一致しており、形を近づけた可能性もありそうです」(笠原氏)。



7



6

1981年 / 静岡県静岡市  
芹沢銈介美術館 ドアハンドル

白井晟一の生み出した象徴的な建築は、今も多くの人の心を惹きつけてやまない。その魅力のひとつは、選びぬかれた製品によって統一された世界観だろう。

「白井は建物に入れる家具まで自らヨーロッパなどで買い付け、細部までひとつの世界観で統一していました。白井によってデザインされていないものでも白井の目を通して選び取ることで、固有の世界観をつくり出していました」と笠原氏は言う。

細部へのこだわりは、金物にも及んでいた。建築金物の老舗、堀商店によると、白井が海外で見つけた金物を持ち込んで、それをモチーフとする金物を特注した記録も残っているという。

実際に白井の建築を訪れて金物に注目すると、一般的なものに比べると異質な存在感がある。たとえば「芹沢銈介美術館」の特別室のドアノブは、片手ではもてあますほど大きく、ドアの端ではなく中心に据えられている。

「モダニズムでは、壁からドアハンドルまであらゆる部材が、建物に連関する体系の一部としてデザインされます。しかし白井のドアハンドルは、建築から自立したひとつのオブジェのような存在感があります」と笠原氏は分析する。

「同時代のモダニストたちとは異なる白井の

手法は磯崎新によって“マニエリスト”と評されました<sup>01</sup>。また独特の物や形の選択基準は、“晟一好み”、つまり白井の内面から出てきたものだと捉えられました」。

しかし果たしてそれだけなのか——笠原氏は疑問を呈す。

「白井の選択は、磯崎が言うように個人の観念に基づいてはいますが、それだけではないように思います。白井の残した文章からは、とりわけ時間や歴史を意識していることが伝わってきます。『豆腐』『めし』という有名なエッセイでも、白井が目したのは“用”の美ですが、それが“常”のなかから生まれるものだと論じています。つまり日常で育まれて豆腐やめしの姿になるという、長い時間や歴史のなかから生まれる美しさだと言えます」（笠原氏）。

このような、長い時を経て培われる美や作法を重んじる白井の姿勢は、建築にも現れていると笠原氏は考える。

「白井の建築には、ヨーロッパの古典的な建築からの影響が感じられます。それも何らかの様式を援用するというのではなく、長い歴史のなかで培われた作法に則っている印象があるのです。西洋建築の作法とは、たとえばオーダーです。屋根、ペディメント、エンタブラチュ

ア、柱頭、柱、基壇という、序列を含めた構成で、それぞれの部分は自立していますが全体としては秩序があるのです」（笠原氏）。

白井のドアハンドルが、自立したオブジェのような存在感をもちながら、大きな秩序のなかに位置づけられているように見える背景には、時間や歴史を意識した物や配置の選択がありそうだ。

**01** 磯崎新「凍結した時間のさなかに裸形の観念とむかい合いながら一瞬の選択に全存在を賭けることによって組立てられた《晟一好み》の成立と現代建築のなかでのマニエリスト的発想の意味」『新建築』新建築社、1968.2

**笠原一人** かさはら・かずと  
京都工芸繊維大学助教／1970年生まれ。1998年京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。2010-2011年オランダ・デルフト工科大学客員研究員。近著に、『村野藤吾の建築：模様が語る豊饒な世界』（共著、青幻舎、2015）など。

**白井原太** しらいげんた  
建築家／1973年生まれ。多摩美術大学建築学科卒業。設計事務所を経て、2000年より白井晟一建築研究所。祖父である白井晟一の仕事の保存、利活用にも取り組む。

**平塚 桂** ひらつか・かつら  
編集者、ライター／1998年京都大学工学部建築学科卒業。2001年同大学大学院工学研究科環境地球工学専攻修了。2000年ばむ企画を共同設立。



2

赤レンガで覆われたチャペル。礼拝堂の床を掘り下げること天井高を稼ぎつつ、緑豊かな周辺環境となじませた空間が特色だ。ここでは堀商店のレバーハンドルが、事務室の扉と礼拝堂脇の小部屋の扉の2カ所で現在は使われている。これは白井がしばしば用いたもので、先がくるとカーブした取っ手はコリント式の柱頭などに登場するモチーフ、アカンサスの葉を思わせる。「ヨーロッパで馴染んでいるアカンサスは唐草模様的一种なので、東洋にも通じます。白井はこれを普遍的かつ無国籍なモチーフだと捉えたことから、選んだのかもしれない」と笠原氏は分析する。装飾的で、もの自体に存在感がありながら、空間に調和しているのは、長い歴史のなかで育まれたモチーフの効果によるのかもしれない。



1

- 1 事務室のレバーハンドル。堀商店製
- 2 礼拝堂前小部屋の扉・外側
- 3 礼拝堂大扉・内側
- 4 同レバーハンドル。目線ほどの高さに設置されていて、崇高なものに手を差し伸べるような開け方になる

1980年／東京都渋谷区  
松濤美術館  
ドアハンドル



1

韓国産の粗い花崗岩で覆われた、シンメトリーな美術館。受付を通過して右手に、円が連なる加工がなされた真鍮の扉がある。「金の色遣いも、円のモチーフも東洋的です。白井は歴史様式や作法に従いながら自立したものをデザインしているように見えます」と笠原氏。この扉には堀商店のレバーハンドル、特別陳列室の扉には芹沢銈介美術館のものとよく似たシュラーゲ社のドアノブが使われている。「レバーハンドルは先が鋭い一方、丸くて柔らかくもある。ドアノブは西洋的だが仏具のデザインにも似ていて東洋的でもある。両義的な表現をもつことも、白井が選択するものの特徴であるように思います」（笠原氏）。

- 1 1階事務室のレバーハンドル。堀商店製レバーハンドル「MCR」
- 2 同扉・外側
- 3 2階特別陳列室のドアノブ。シュラーゲ社製。ノブの周囲を無数の小さな円が囲むデザイン

【撮影協力：渋谷区立松濤美術館】



3



3



4

# 土木のランドスケープ | 06

## モエレ沼公園

北海道札幌市

ナビゲーター・文 | 八馬 智 (千葉工業大学教授)

写真 | 新 良太

土木施設はその機能を果たすために、時として人を遠ざけてきたが、徐々にその巨大な体を開き、人に寄り添いはじめた。公共空間として、ランドスケープとして、人の手に復権された新しい土木の景色をみつけてみよう。

ゴミの埋め立て処理と土地造成は、社会インフラを形成する一続きのプロジェクト。埋め立て後は、市街地の地盤になったり、工場用地になったりするが、ここでは総合公園として整備された。そこに一人のアーティストが関与することで、公園の大地そのものが彫刻になり、土木事業がアートワークに昇華した。写真はプレイマウンテン。イサム・ノグチが1933年に発想したものが原型。階段に瀬戸内産の花崗岩が使われた





1



2



3



4

## 大地の意味を書き換えた壮大なランド・アート

### ゴミ処理場に築かれた彫刻公園

札幌市内を貫流する豊平川は、かつて石狩低湿地で大きく蛇行を繰り返していた。その地球の営みの痕跡のひとつが、三日月湖（河跡湖）のモエレ沼である。その周辺は氾濫が起きやすく生産性が低い泥炭地であるために開発が遅れていたが、河川改修事業や土地改良事業などが続けられたことで、ようやく牧草地などに利用されるようになった土地だ。札幌は1972年冬季オリンピックで都市インフラの整備が加速するが、この地にもその波が訪れた。ゴミ処理場として使いつつ、のちに都市公園として整

備する計画だ。三日月湖の内側全域を埋立対象地として1979年から1990年までゴミの搬入が続き、域外の公共工事で発生した建設残土と合わせて埋め立てられた。それと並行しながら、市を緑地の帯で囲う「環状グリーンベルト構想」の拠点となる総合公園として計画され、1982年から盛土や植樹の公園造成が始まった。さらに治水事業の一環として、モエレ沼の浚渫を行って雨水貯留量を増し、園内にも窪地をつくって貯水できるようにするなど、調整池の機能も加えられた。つまり、モエレ沼公園は極めて人と縁遠かった土地を多角的に都市と関与させる複合的な事業の結果なのだ。

ゴミの埋め立てが終盤に差し掛かったころ、さまざまな縁が絡み合って登場したのが、イサム・ノグチである。1988年3月、初めて札幌に招かれたイサムは、ゴミ運搬のトラックが行き交う荒涼とした現場を長靴で歩きながら、「すごく空が広い。ここには、フォルムが必要です。これは僕のやるべき仕事です」と語ったという。そして、イサム自身が半世紀以上に構想した「彫刻としての公園」が実現に至った。

温め続けたアイデアの象徴である「プレイマウンテン」、標高62mから公園全体を俯瞰できる「モエレ山」、円状のカラマツ林に囲まれた「海の噴水」、中心施設の「ガラスのピラミッド」など、

幾何学図形に基づく単純明快でダイナミックな造形要素が、建設残土などを利用しながら造成され、のびのびと配置されている。ここでは公園に彫刻があるのではなく、公園の土地自体が彫刻。不安を感じるほどにスケールが大きく、人工的で唐突な印象を受けるかもしれない。しかし、一歩踏み出して身を委ねることで、他の場所では得られない開放感が体験できる。事実、年間80万人を超える利用者が国内外から訪れ、札幌屈指の観光拠点になっている。

### 復元される意志

イサムは最初の札幌訪問から9カ月後、マスタープランを残して同年12月に急逝した。その時点で計画が頓挫する可能性も十分にあった。しかし、イサム・ノグチ財団の監修のもと、奇跡

的にイサムの意志が受け継がれ、まごうことなき遺作として17年後の2005年にグランドオープンした。

残された設計チームは、「正解」がわからずに途方にくれながらも、根気強く仕事を進めた。その作業は、偉大な作曲家が残した楽曲を緻密に再現するオーケストラ、あるいは、さまざまな痕跡から古代文明の生活を探る考古学者のようなものかもしれない。イサムが残した言葉や図面はもちろん、世界中に散らばる作品を手がかりにしながらコンセプトや造形を読み解き、やがてイサムの意志を見事に「復元」した。

それは全体の構想にとどまらず、各要素のプロポーシオン、材料、ディテールに至るまで、詳細に検討された。シンボリックな場所をつくることを念頭に、子どもの遊び方に注意を払い、日本の基準類に適合させながらも、できるだけ

- 1 モエレ山よりプレイマウンテンを望む。「最も思い入れの強かったプレイマウンテンのためのビューポイントとしてつくったのではないか」とランドスケープデザインをしたキタバランドスケープの斉藤浩二氏は語る
- 2 公園のビジターセンターでもあるガラスのピラミッド。夏季はミスト噴水が行われている
- 3 モエレ山への登山路。札幌市東区で唯一の山で、山頂からはモエレ沼公園だけでなく市内全体を見渡することができる
- 4 プレイマウンテンをスロープ側より見る。敷地全体が定期的に芝刈りされるなか、プレイマウンテン横の山肌には原野のような野生に近い草地がつくられた



1



2



3



4



8



5



6



7

余計なことはしないよう設計されたという。その背景には、のちに札幌市長となった桂信雄助役を中心に、「イサム先生との約束」を守るべく、設計チームが永続的に機能できるフレームがつくれたことも大きいだろう。

### 自然と人為が交錯する場所

この取り組みは、現在も粛々と続けられている。公園完成までは30年かかるというイサムの意志を引き継ぎ、常に変化する樹木にあわせて手を入れ続け、地震や台風などの自然災害、ゴミの埋め立てに起因する不同沈下、遊具の安全基準の変更など、計画外のことにも対応。また、市民を中心とするNPO法人「モエレ沼公園の活用を考える会（モエレ・ファン・クラブ）」により、公

園のあるべき姿が模索され続けている。

世界中のイサム・ノグチ作品から引用しながらつくられたために、この場所でなくても成立したと考えることも可能である。しかし、壮大なスケールで自然と人為が交錯する公園は、結果的に北海道らしさを獲得している。少なくとも、札幌市域の標高1,000mを超える山々から続く扇状地と広大な低湿地の上に、近代以降計画的につくられたグリッド状の都市や農地が展開するというメリハリのある土地の成り立ちには、確実に調和している。そこに、厳しい自然環境を受け入れながら新しい人工環境を切り開くという精神性が重なり、北海道のアイデンティティーが形成されたと言えるかもしれない。

ランドスケープを担当してきたキタバランドスケープの齊藤浩二氏の「本人がいないからこ

そ、ここまで辿り着けたのでは」という言葉には、たいへん真実味がある。もしイサムが存命だったら、芸術家としてさらに高い理想を掲げて変更を求め、その調整や手戻りのために事業の途中でチームが空中分解したかもしれない。当初のマスタープランが厳格に保護されたことで、北の大地にフィットしたピュアさが永続したのではないだろうか。

取材協力：キタバランドスケープ、札幌市

八馬 智 はちま・さとし  
千葉工業大学教授／1969年千葉県生まれ。1993年千葉大学工学部工業意匠学科卒業。1995年同大学院修士課程を修了し、株式会社ドーコン（旧・北海道開発コンサルタント）に入社。2004年より千葉大学大学院助教。2012年より現職（創造工学部デザイン科学科）。博士（工学）。著書に『ヨーロッパのドクを見に行こう』（自由国民社、2015）がある。

### モエレ沼公園概要

所在地 | 北海道札幌市東区モエレ沼公園1-1  
規模 | 188.8ha  
設計期間 | 1988年3月-2003年3月（当初設計は1981年-）  
施工期間 | 1982年6月-2005年3月  
※ イサム・ノグチのプラン以前に別の設計図があり、それをもとに1982年より施工は開始されていた。

事業者  
札幌市  
設計  
マスタープラン | イサム・ノグチ  
監修 | イサム・ノグチ財団、ジョージ・サダオ  
設計統括 | アーキテクトファイブ  
造園 | キタバランドスケープ



配置図

- 1 プレイマウンテン横のテトラマウンド。芝生のマウンドの上に、直径2mのステンレス丸管を三角錐に組んだモニュメント
- 2 敷地のおおよそ中心に位置するアクアプラザ・カナール。イサム・ノグチ没後にデザインしなければならなかった噴水部分は、慶應義塾大学内の萬来舎のためにイサム・ノグチが制作した暖炉がモチーフにされた。水路には北海道産の比布石、牡管石が用いられた
- 3 カラマツの林の中心にある海の噴水。高さ25mまで吹き上がったあとに、直径48mの巨大な噴水池に水が満たされていく様子は「水の彫刻」ともいわれる
- 4 サクラの森の並木道。イサム・ノグチがかかわる以前の1983年より既にこの場所にサクラが植栽されており、これを活かしてサクラの森をつくった
- 5 プレイマウンテンの階段側の麓に位置するミュージックシェル。職人が研磨した緩やかな曲線が特徴的で、モニュメントの中はトイレになっている。このほか、モエレ沼公園では、一見わからないようトイレが設置されている
- 6 イサム・ノグチが過去にデザインしてきたさまざまな遊具がサクラの森の中に置かれた
- 7 モエレ沼の水辺はあえて、親水空間として整備することはせず、野生の風景を残している
- 8 イサム・ノグチが、海のない札幌市のためにつくった、子どものための水遊び場、モエレビーチ。3つの円を緩やかにつないだ形をしており、サンゴで舗装されている。夏の暑い日には子どもたちであふれかえる

# ダブルツリーbyヒルトン<sup>ちやたん</sup>沖縄北谷リゾート

美しい沖縄の西海岸に臨み、特別なひとときをもたらす  
オーシャンフロントリゾートホテル

2018年6月1日に開業した「ダブルツリーbyヒルトン沖縄北谷リゾート」は、ヒルトンが展開する“ダブルツリーbyヒルトン”ブランドの国内3軒目のホテルで、同ブランドのリゾートホテルとしては国内初進出となる。那覇空港から車で約40分の沖縄本島中部、近年目覚ましいリゾート開発が進む北谷町美浜、フィッシャーナ地区の270度開けたオーシャンフロントに位置し、目前に広がる美しい沖縄北谷の海を五感で感じることができるホテルだ。

ホテル外観は隣接するヒルトン沖縄北谷リゾートや街並みと調和するように白色と琉球石灰岩色を基調とした2種類の厚みが異なるタイルを使用し、壁面に凹凸と陰影をつくり出している。客室棟のオーシャンビュー側のファサードは、下階に向けて徐々にバルコニーが海側に張り出す“海の特等席”を持つ客室となっている。一方、シティビュー側のファサードには、海のそばの立地であることの表現として白色と、琉球石灰岩色のタイルの中にアクセントカラーとして北谷の海の色をイメージした翡翠色の施釉タイルを用いた。

また共用棟には客室と同様、“海の特等席”としてルーフトップバーが備えられ、翡翠色の海やサンセットを楽しむことができる。屋外のプールガーデンには、落ち着いた雰囲気のある大人向けプールと子ども向けのスライダー付きプールの2種類のプールが設けられている。いずれもプール底の仕上げに鮮やかな青系のモザイクタイルが使われ、翡翠色の海とのつながりをイメージしている。



1



2

- 1 ホテル全景 [撮影：川澄・小林研二写真事務所]
- 2 オーシャンビュー側外観
- 3 外装壁面ディテール(低層部)
- 4 外装壁面ディテール
- 5 シティビュー側外観
- 6 プール



3



4



5



6

ホテル内のインテリアデザインは“翡翠色の海へのシークエンス”をテーマとしている。エントランスロビーは“海の奥”をイメージし、低い位置に明るさを配置し、ゆったりくつろげる空間とした。ロビーの先の開放的なエントランスラウンジは海に向けて光と空の抜ける場所で、大開口から光を取り込み、柔らかな素材感の家具でリゾートホテルらしさを演出している。レストランは海やプールガーデンの緑を借景とするインナーテラスをイメージし、明るい木調と陰影を生むタイルで空間が構成されている。

また、共用部のトイレは洗練された空間で、1階と2階でそれぞれ異なるデザインとなっている。ゲストの快適性を向上させるため、小便器間には床からパーティションを立ち上げ、大便器ブースは天井までの壁で仕切るなどの配慮がされている。

客室は約30m<sup>2</sup>が中心の全160室となっている。その内の約6割の98室がオーシャンビューで、存分に海の景色を楽しめる大型テラスが付いた客室などで構成されている。また、家族向けのファミリールーム（40m<sup>2</sup>）や、最上階にはキングサイズのベッドでラグジュアリーな時間を堪能できるスイートルーム（60m<sup>2</sup>）も4室配置されている。

客室デザインは、砂浜の波や珊瑚をイメージした色彩、煌めく様子を表現した壁紙、カーペットデザインなどの空間演出で、オーシャンビューの景色とつながるリゾートホテルならではの非日常を感じる空間となっている。客室の水まわり空間は木の温もりが感じられる設えて、先進機能を備えた浴室やトイレが採用され、ゲストに快適で特別なひとときをもたらす。レインシャワーを設置したヒルトンブランドこだわりのバスルームは、壁面中央にハンドシャワー切替えと温度調整のハンドルを設置した、快適性の高い空間となっている。

取材協力：光井純&アソシエーツ建築設計事務所

#### 建築概要

名称 | ダブルツリーbyヒルトン沖縄北谷リゾート  
 所在地 | 沖縄県中頭郡北谷町字美浜43  
 竣工 | 2018年3月  
 施主 | オリックス不動産  
 設計・施工 | 大林組  
 デザイン監修 | 光井純&アソシエーツ建築設計事務所

#### LIXIL使用商品

[外壁]  
 外装壁タイル | FT-40B/OM-4663-14A、15B、17B、12C、16C、84B  
 [プール]  
 床・側面タイル | IM-20P1/MUS-3N:3T:2N=4:4:1MIX (プール床面・側面)、他  
 [ロビー]  
 床タイル | TRUSTTITANGP30X60 (DINAONE)  
 [レストラン]  
 内部床タイル | K9153230MA (DINAONE)  
 [客室5001号室・水まわり]  
 浴室 | BZW-1620TAE (特注)  
 トイレ | BC-P11PF+DV-P110AP  
 内装壁タイル | タイル 400 (mm) × 600 (mm) 角 (タイルパネル複合板)  
 [共用部水まわり]  
 大便器 | BC-J21MS-AY・DV-J213M-R2JE1  
 小便器 | U-A51AP  
 洗面器 | L-555FCRS  
 自動水栓 | AM-200V1  
 オートソープ | KS-922MTDA



7



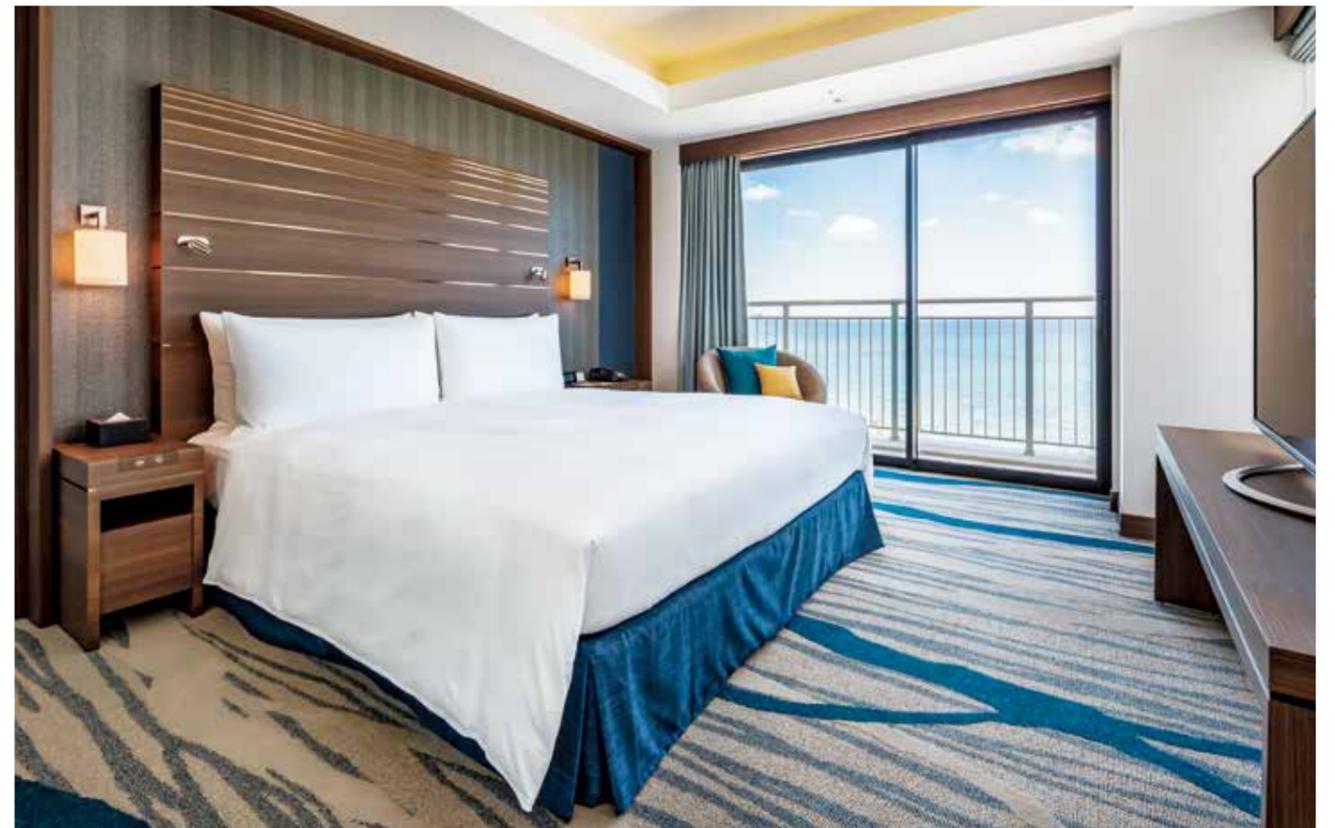
8



9



10



11



12



13



14

- 7 ロビー
- 8 レストラン
- 9 1階女性用トイレ
- 10 2階男性用トイレ  
[以下、客室5001号室]
- 11 寝室
- 12 リビング
- 13 浴室
- 14 トイレ

## LIXILのユニバーサルデザイン

— ひとりにいい、みんなにいい

文 | ひとみな (UD) プロジェクトチーム



国際福祉機器展 H.C.R. 2018 LIXIL出展ブース

## LIXILのユニバーサルデザイン

LIXILでは、コーポレート・レスポンスビリティ (CR) 戦略の3つの優先取組み分野のひとつに「多様性の尊重」を掲げ、「ユニバーサル社会の実現」を目指しており、「ユニバーサルデザイン (UD)」の考え方を、ものづくりだけでなく、心づくりにも広げ、多様性への理解を深める活動を実施しています。互いを受け入れることを学ぶ「ユニバーサル・ラン (スポーツ義足体験授業)」や、社員が講師となるUD出前授業「ひとりにいい、みんなにいい」など体験型のイベントや授業を通じ、地域社会や子どもたちとともにおもいやり、おもてなしの活動に取り組んでいます。

## LIXIL ユニバーサルデザイン方針

住まいは家族みんなが使うものなので、さまざまな身体状況への対応が求められます。LIXILでは、「LIXILユニバーサルデザイン方針」(図1)を策

定し、子どもからお年寄りまで、一人ひとりが豊かで快適な生活をおくるために、多様な視点からUDアイデアを取り入れ、「わかりやすい」「使いやすい」「安全が安心に」「愛着がわく」ような製品・サービスの提供と、一人ひとりの変化に応じた空間づくりを目指しています。

## 国際福祉機器展の取組み

そのコミュニケーションの場のひとつに、昨年10月に開催された国際福祉機器展があります。LIXILでは、「UDアイデアにより、誰もが便利で快適に暮らす楽しみを提案する」をコンセプトに、車椅子対応キッチン「ウエルライフ」で料理することの楽しさや、IoTホームリンク「ライフアシスト」による設備連動が可能にする快適な暮らしを、寸劇と体感展示でご覧いただきました(写真1)。その他にも、玄関から水まわり、庭まわりに至るまで、車椅子に対応したストレスフリーな生活を、数多くの製品で提案しました。



[図1] LIXILユニバーサルデザイン方針



[写真1] 国際福祉機器展での展示の様子



[写真2] 車椅子対応キッチン「ウエルライフ」

## 新しくなった車椅子対応キッチン「ウエルライフ」

国際福祉機器展における展示の見どころのひとつとなったのが、車椅子を使う方や、立ち仕事をつらいと感じる方が、座ったまま快適に料理ができるよう配慮されたキッチン「ウエルライフ」(写真2)です。今回新しくなったウエルライフでは、開発段階から車椅子を使う方にご協力いただき、どうすれば座った姿勢でより快適に調理できるかを、料理する様子をさまざまな角度から研究し(写真3・4)、負担の大きい動作や移動を減らして無理なく作業できるよう、足元の形状やシンク・調理スペース・コンロの配置を工夫しました。ウエルライフは、車椅子に座ったままでも奥まで手が届きやすいように足元をオープンにした



[写真3] 調理中の動作を撮影



[写真4] 別室で調理行動を観察・分析

## 「ウエルライフ」商品サイト

<https://www.lixil.co.jp/lineup/kitchen/wellife/>

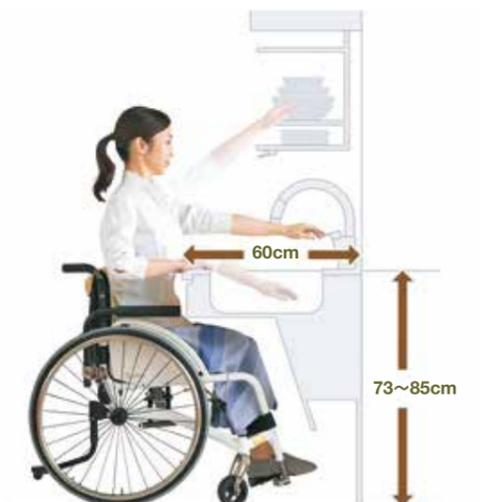
## 商品展示

ショールーム東京、ショールーム名古屋、ショールーム南港にて展示中

設計(図2)が特徴で、座った姿勢でも使いやすい深さの浅型シンク(写真5)を標準装備。また、座ったままでもオンオフできるリモコン対応のレンジフード(写真6)や、リモコンで昇降する電動式の吊戸棚「オートダウンウォール」(写真7)など、便利な機能が豊富に揃っています。

また、今回大きく変わったのは、使い勝手だけではなくではありません。毎日使うものなので、愛着をもって長くお使いいただくこともユニバーサルデザインの大事な要素と考え、お気に入りのインテリアとコーディネートできるよう、さまざまな空間にマッチするデザインとカラーの扉、全19色を取り揃え、選んでいただけるようにしました。

国際福祉機器展では実物の商品を展示し、実際の使い勝手を多くの方にお試しいただき、貴重なご意見も多く伺うことができました。



[図2] 足元をささげらないオープン設計



[写真5] 浅型シンク



[写真6] リモコン対応レンジフード [写真7] オートダウンウォール

## IoTホームリンク「ライフアシスト」による暮らしの提案

IoTホームリンク「ライフアシスト」は、家電やデジタル機器だけでなく、玄関ドアや窓シャッターなどの建材まで、IoT技術によりトータルでつながる住まいのリンクシステムで、センサ感知やスマートスピーカー等のきっかけ（Trigger：トリガー）と、建材や設備、機器等の動作（Action：アクション）を自由に組み合わせることができるアシストルール機能を搭載しており、ひとつのきっかけで同時に複数動作させることができるのが特徴です（図3）。さまざまな機器をつなげることで、家の状態確認や遠隔操作をひとつのアプリで一括管理できるようになり、たとえばスマートフォンから、玄関ドアの施錠や、お子さんの帰宅、ご高齢の方の外出等、玄関の様子を確認したり。また、帰宅前にエアコンをつけたり、お風呂を沸かす、といったことも可能になります。生活シーン別に設定することもできるので、ご自身のライフスタイルに合わせてカスタマイズできます。

IoT技術の普及はまだこれからですが、ご高齢の方や障がいをお持ちの方が、暮らしの中で困難を感じる動作をサポートするものとして活用できるのではないかと考え、今後も検討を進めていきます。

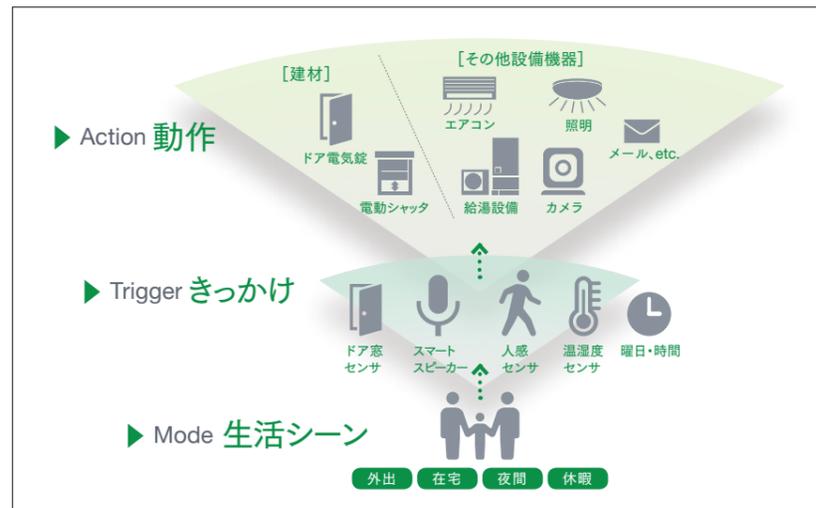
## 今後に向けて

LIXILでは、身体状況や障がいの有無によらず、誰もが前向きに楽しく暮らせることを実現していきたいと考えています。そのために、製品のひとつひとつが使いやすいことはもちろんですが、それぞれを組み合わせることで空間に配置した時に「ほんとうの使いやすさ」が生まれる、と考えています。LIXILのユニバーサルデザインは、誰もが安心して長く使いこなしていけるだけでなく、使う人の動きや変化も考え、心の負担も軽減する、そんな住環境の構築を目指しています。

今後も商品開発はもちろん、お客さまに役立つ情報の発信など、ご使用になる方に寄り添った取組みを続けていきます。ぜひご期待ください。



ライフアシストのある暮らし



【図3】アシストルール機能イメージ図

IoTホームリンク「ライフアシスト」商品サイト  
[https://www.lixil.co.jp/lineup/solar\\_roof\\_outerwall/lifeassist/](https://www.lixil.co.jp/lineup/solar_roof_outerwall/lifeassist/)  
 商品展示  
 ショールーム立川、ショールーム南港にて展示中

ユニバーサルデザインに関する、各種カタログ、サイトもご用意しています。ぜひご活用下さい。



左から、カタログ「LIXILユニバーサルデザイン」、カタログ「住まいのUDガイドブック」  
 WEBサイト「LIXILユニバーサルデザイン」<https://www.lixil.co.jp/ud/>

## INFORMATION

### NEWS | LIXILからのご案内

#### 2018年度グッドデザイン賞を受賞

本年度は、LIXILグループから11商品が「2018年度グッドデザイン賞」（主催：公益財団法人日本デザイン振興会）を受賞しました。

#### 【受賞商品一覧】

**LIXIL**：窓 TOSTEM「LW」、タイル INAX「アレルピュア」、宅配ポスト「スマート宅配ポスト」、浄水器内蔵シングルレバー混合水栓 INAX「オールインワン浄水栓 AJタイプ」（2019年春発売予定）、開発途上国向け簡易式トイレシステム「SATO」（日本未発売）、トイレ用自己発電リモコン INAX「大型壁リモコン（発電式）・洗浄壁リモコン（発電式）」、住宅設備ユニット「LIFE CORE」※株式会社ブルスタジオと共同プロジェクト  
**LIXIL住宅研究所**：住宅「五世代の家」

**American Standard**：ハンドシャワー「Genie」（日本未発売）※「グッドデザイン・ベスト100」選出

**GROHE**：キッチン水栓 GROHE「Blue Home Pull Out」、シャワーシステム GROHE「Smart Control Concealed」（いずれも日本未発売）



**GOOD DESIGN AWARD 2018**

左 | フレームインデザインを採用した大開口窓「LW」  
 右 | スリム化と上質感を実現した「オールインワン浄水栓 AJタイプ」

### BOOKS & WEB | LIXIL出版新刊案内 <http://www.livingculture.lixil/publish/>



『Inui Architects』  
 著者 | 乾久美子  
 本体価格（予備）| 4,600円



**LIXIL BOOKLET**  
 『吉田謙吉と12坪の家——劇的空間の秘密』  
 著者 | 塩澤珠江、平田オリザ、布野修司  
 本体価格 | 1,800円



**LIXIL BOOKLET**  
 『富士屋ホテルの営繕さん——建築の守り人』  
 著者 | 山口由美、吉田綱市  
 写真 | 白石ちえこ  
 本体価格 | 1,800円



**10+1 website**  
<http://10plus1.jp/>  
 建築・都市を巡るサイト「10+1」では、毎月更新の特集記事のほか、特別記事や書評、建築写真アーカイブ、イベント情報をお届けします。

### EXHIBITIONS & EVENTS | 展示会・イベント <http://www.livingculture.lixil/gallery/>

LIXILギャラリー | 東京

〈巡回企画展〉  
**「吉田謙吉と12坪の家——劇的空間の秘密」**  
 会期 | 3月7日（木）～ 5月25日（土）  
 舞台美術家の吉田謙吉が、戦後建てた「12坪の家」の独創的な空間づくりの秘密を、そこに至る系譜を辿りながら約140点の資料とともに探ります。



「12坪の家」書斎の窓に腰掛ける吉田謙吉と居間兼ホール入り口に立つ娘・珠江（1949年夏）[写真提供：吉田鹿乃子]

〈建築・美術展〉  
**クリエイションの未来展 第18回 宮田亮平監修「(工藝)とは…」**  
 会期 | 開催中、3月19日（火）まで



藤沼 昇 東編花籃（たばねあみはなご）[阿呷（あうん）] W440×D440×H260mm

〈やきもの展〉  
**寄神宗美展「RE-CREATIONS」**  
 会期 | 開催中、3月21日（木）まで



「Re-Creations 桜 -1」  
 W440×D150×H415mm  
 [Photo：Hatakeyama Takashi]

LIXILギャラリー | 大阪

「台所見聞録——人と暮らしの万華鏡」  
 会期 | 3月8日（金）～ 5月21日（火）  
 世界的に失われつつある伝統的な台所や、近代以降に劇的に変化した日本の台所など、人々が求めてきた台所空間を模型やスケッチ、家政書などから探ります。



家の最上階にあるナベールの台所（1/10模型）  
 所蔵 | 宮崎玲子 [撮影：佐治康生]

INAXライブミュージアム

「和製マジョリカタイル——憧れの連鎖」  
 会期 | 開催中、4月9日（火）まで  
 会場 | 「土・どろんこ館」企画展示室  
 日本のマジョリカタイルの歴史をひもとくと、起源は19世紀のイギリスにあります。明治時代、洋館を飾ったヴィクトリアンタイルの美しさに模倣を始めた技術者。内装タイルのパイオニアメーカーの誕生。そして世界へ渡った日本のタイル。人々を魅了する「タイルの憧れの連鎖」に迫ります。



展示風景：マジョリカタイルの回廊

川島織物文化館

〈明治150年 平成30年記念〉  
**「皇室とのゆかり 行啓とご即位のしつらえ」展**  
 会期 | 開催中、10月18日（金）まで  
 大正天皇の即位礼で京都御所の紫宸殿に掛けられた、織物の織下絵・試織や、ゆかりの品約60点を展示しています。



## GALLERY & MUSEUM INFORMATION

LIXILギャラリー／東京  
 Tel: 03-5250-6530  
 休館日：水曜日、2月24日（日）

LIXILギャラリー／大阪  
 Tel: 06-6733-1790  
 休館日：水曜日（祝日は開館）

INAXライブミュージアム  
 Tel: 0569-34-8282  
 休館日：水曜日（祝日の場合は開館）

川島織物文化館  
 （川島織物セルコン内）  
 Tel: 075-741-4120  
 075-741-4323（予約専用）  
 ※見学は事前予約制です  
 休館日：土・日・祝日（会社休業日）

所在地や開館時間などの詳細はWEBサイトをご覧ください。



建築家による平面表現の連載企画。設計業務の傍ら、日常や旅先で見た風景を描きとめ続ける堀越優希。「中景」と自ら形容している堀越氏の絵のなかでは、現実の色味・形が一部漂白され、バラバラだったものが色彩・模様・透視によって統合される。設計論まで広がりをもつ「中景」なる眼差しによる紙上の建築。

## 紙上の建築 06

# 建築としての中景

堀越優希

都市で注目を浴びる巨大なシンボルタワーや、光の粒に還元される夜景のような景色は、足元の景色から分断されている。一方で、古い町並みや自然の中では、土地固有の材料や植物などが景色に連続性を与える。現代の都市環境はスケール感にグラデーションが乏しく、意識は近景と遠景に二分化されやすい。

「中景」とは、二分化した遠景と近景の間を補完する要素である。都市には標識や広告などの情報と刺激が無数にあり、自然と疲れぬように多くの情景を流し見している。中景はそうした日常の無意識のなかに隠れている。中景を知覚することで、異なるスケール同士がひとつつながりとなる「風景」の再構築が可能となる。東京でも、行き先や時間に縛られず散歩をすると、普段目に入らなかつたものごとくに気がつき、見慣れた場所で「風景」を再発見することがある。散歩者には、意識的な事象と無意識的な事象の双方を捉える中景的な視覚がある。都市の風景を思考するためには、まず中景を捉える視覚を会得しなくてはならない。

これらのドローイングは連作の一部である。現実の視覚を一度解体するため、図と画の中間的な線と透過する色面を用いている。隠されたスケールのつながりを透視することで、日常から地続きであり、どこまでも広がる風景の再構築を試みる。

ほりこし・ゆうき

建築家／一九八五年東京都生まれ。二〇〇九年、東京藝術大学美術学部建築科卒業。二〇一〇年、リヒテンシュタイン国立大学留学。二〇一二年、東京藝術大学大学院修了。石上純也建築設計事務所、山本耀司アーキテクトを経て、二〇一九年独立。主な担当作品に、「Polytechnic Museum, Moscow」「東京藝術大学 Arts & Science LAB」「小高交流センター」がある。ドローイング作品として、絵本「家の理」作画（難波和彦著）、教科書「PROMINENCE」挿画、音楽CDアートワークなどがある。

